

松本市文化財調査報告 No.95

SHIOKARA

松本市塩辛遺跡 I

—緊急発掘調査報告書—

(遺 構 編)

1992・3

松本市教育委員会

SHIOKARA

松本市塩辛遺跡 I

—緊急発掘調査報告書—

(遺 構 編)

1992・3

松本市教育委員会

序

松本市街の北方に位置する岡田本郷地区には多くの遺跡が存在していることが、以前より行なわれていた調査結果から知られておりました。この度県営は場整備事業が当地にも及び、塩辛遺跡を含む地域もその対象地となりました。そこで文化財の保護を図るため、松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行なうこととなりました。

発掘調査は市教育委員会によって組織された調査団により、平成2年12月から翌3年3月の長期間にわたって行なわれました。作業は真冬の厳寒にあたったため、降雪や凍結の影響を受け、最悪の調査環境になりましたが、参加者の皆様の並々な御尽力により無事遂行することができました。その結果、縄文時代の住居址15軒、古墳時代末から奈良・平安時代のもの12軒の計27軒を発見したほか、古墳時代末から奈良時代初頭にかけての建物址11棟など数多くの遺構を調査し、また同時期の土器を多数得るなど、多大なる成果を収めました。今後地域の歴史を解明していく上で大変役立つ貴重な資料になることと思います。

しかしながら本調査の終了は、同時に塩辛遺跡が消滅してしまったことを意味します。私たちの生活を豊かにする開発事業はなくてはならないものですが、それによって失われてしまう遺跡をいかに保護していくかという両者の矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護への御理解を深めて頂ければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか大変な発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた女鳥羽川土地改良区、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

松本市教育委員会 教育長 松村好雄

例 言

1. 本書は平成2年12月10日から翌3年3月31日にかけて行なわれた、松本市塩辛遺跡の緊急発掘^{しから}調査報告書であり、遺構編と遺物編からなるうちの遺構編である。本遺跡は松本市大宇岡田伊深、稲倉、洞の3地籍にかけて所在する。
2. 本調査は県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査であり、長野県より委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。
3. 本書の執筆は第1章：事務局、第2章第1節：森義直、第3章第2節1(1)：久保田 剛、その他：三村竜一が行なった。
4. 本書作成にあたっての作業分担は次に掲げるとおりである。
トレース 開嶋八重子、村山牧枝、村田昇司
遺構図整理 石合英子
図版作成 久保田剛、堀加代子、上條尚美、丸山恵子
遺構写真 今村 克、三村竜一
一覧表作成 久保田剛
5. 縄文時代の住居址等の時期判定には島田哲男氏の御協力を得た。
6. 本書の編集は事務局が行なった。
7. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したために、本書から割愛したが、出土遺物、図類と共に松本市教育委員会が保管している。

目次

序

例言

目次

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録……………2

第2節 調査体制……………3

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地形・地質……………5

第2節 周辺遺跡……………7

第3章 調査

第1節 調査の概要

1. 調査方法……………12

2. 調査結果……………13

第2節 遺構

1. 竪穴住居址……………16

(1)縄文時代……………16

(2)古墳時代以降……………33

2. 建物址……………48

3. 竪穴状遺構……………61

4. 土坑・ピット……………63

第4章 調査のまとめ……………65

図目次

第1図 遺跡の位置 (1:50,000) ……4

第2図 一般的土層断面……………6

第3図 周辺遺跡……………8

第4図 調査位置 (1:3,000)……………11

第5図 調査区全体図 (1:800)……………14

第6図 縄文時代の遺構配置 (1:400)……………15

第7図 第15号住居址実測図……………21

第17図 第39号住居址実測図……………31

第18図 古墳時代以降の遺構配置(1:400) ……32

第19図 第1号住居址実測図……………38

第28図 第17号住居址実測図……………47

第29図 第1号建物址実測図……………51

第38図 第10号建物址実測図……………60

第39図 竪穴状遺構実測図……………62

第40図 土坑・ピット……………64

表目次

第1表 竪穴住居址一覧表……………66

第2表 建物址一覧表……………67

第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録

- 平成元年9月29日 平成2年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 11月9日 平成2年度補助事業計画書提出。
- 平成2年4月4日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
- 4月4日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月10日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月10日 平成2年度県営ほ場整備事業岡田地区塩辛遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 7月24日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 9月12日 平成3年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月8日 塩辛遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 10月12日 平成2年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 10月15日 平成3年度補助事業計画書提出。
- 11月5日 平成2年度文化財保護事業補助金変更承認申請書提出。
- 11月5日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更申請書提出（増額）。
- 平成3年2月26日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金計画変更決定並びに補助金の増額通知。
- 3月15日 平成2年度文化財保護事業補助金変更交付決定通知。
- 3月31日 平成2年度文化財保護事業補助金確定通知。
- 4月10日 平成2年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金確定通知。
- 5月13日 塩辛遺跡埋蔵文化財拾得物届及び同保管証提出。
塩辛遺跡の発掘調査終了届（通知）提出。
- 6月14日 塩辛遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 10月9日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
- 10月15日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 11月1日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 11月20日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 12月27日 平成3年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 平成4年1月23日 平成3年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節 調査体制

調査団長 松村好雄（松本市教育委員会教育長）

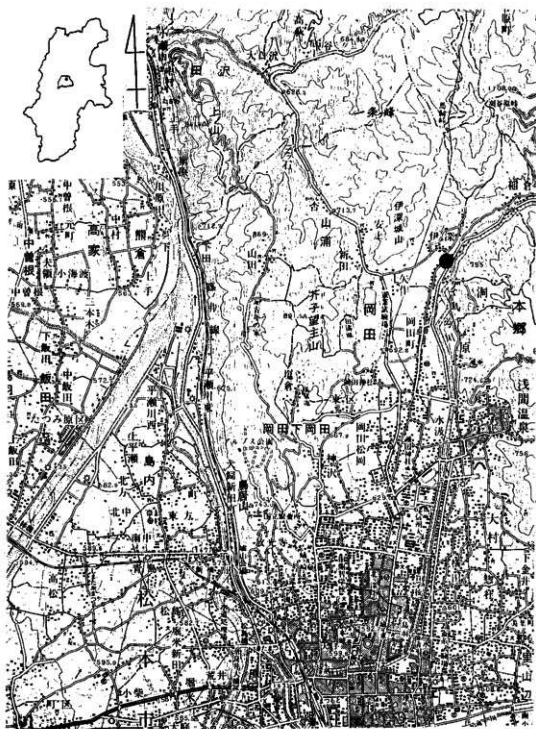
調査担当者 今村克、三村竜一（社会教育課）

調査員 田中正治郎、三村肇、森義直

協力者 赤羽章、赤羽包子、赤羽すまみ、浅輪敬二、石合英子、石川末四郎、因幡美津子、上原松子、内山緑、大久保たつ子、大久保棟子、大久保幸子、大沢眞二、大下恵二、太田千尋、大谷成嘉、大塚製装六、大堀一男、大箭明美、岡部登喜子、上條妙子、上條ため子、上條益子、北沢清治、北沢達二、久根下三枝子、窪田由美、熊谷浩、柴井まさ、桑山智子、小池愛子、小池直人、小岩井美代子、奥定夫、小瀬川厚子、兒玉春紀、小林謙次、小林文子、小松正子、坂下茂、佐藤幸司、下里末子、下里みつへ、鈴木なつ江、瀬川長広、龍澤隆男、田多井亘、塚田つた江、塚田文子、土屋文昭、鶴川登、寺島貞友、中島新嗣、中島千矢子、中島好子、中島治香、中田嘉子、中村恵子、中村嵩、西村啓子、林昭雄、林和子、原沢一二三、平岡忠雄、深井美登利、藤井源吾、藤井久子、藤井マツエ、藤沢ミツ、藤本嘉平、真々部まさ子、三浦節子、三沢元太郎、宮田貞江、百瀬一子、百瀬清子、百瀬鏡代、百瀬義友、矢島利保、柳沢利典、横山恒雄、吉江和美、吉江孝子、吉江園子、吉田勝、米山植興

事務局 荒井寛（社会教育課長）、田口勝（課長補佐）、熊谷康治（課係長）、直井雅尚（主事）、関沢聡（主事）、木下守（主事）、竹内靖長（主事）、久保田剛（事務員）、荒井由美、山岸弥生





● 遺跡の位置

1:50,000



第1図 遺跡の位置

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地形・地質

(1) 地形と地質の概観

塩辛遺跡は松本市北方岡田地区の女鳥羽川が、第三紀層の山地を南に開せきして形成した細長い扇状地の扇頂近くにあり、標高715m付近の右岸に位置している。女鳥羽川は武石峠(1810m)付近から流れ出す中の沢と、三才山峠(1500m)から流れ出す本沢、袴越山(1752m)から流れ出す舟ヶ沢が三才山の一の瀬で合流し西へ向かって流れ、稲倉から流路を120°くらい向きをかえて南に流れ、松本市内に入って90°流路を西に変え、白坂付近で田川と合流している。延長は17.3km、高度差は約1200mあり稲倉より上流は120/1000の勾配をもつ急流で、下流は21/1000の勾配である。そのため稲倉付近を扇頂として、本郷や岡田に広い扇状地を形成し、湯川の線を境として薄川の扇状地と接している。

この扇状地は第三紀層の内村層および玢岩、各種安山岩の礫により形成されている。現在稲倉付近で急角度で曲がっているこの川も、同様な堆積物が城山一帯に見られ、波田ロームを載せていることから、更新世末頃は西南方向に流れていたことがわかる。その後城山一帯の山地の隆起により流路を次第に東にとり、稲倉→岡田西→大門沢へと流れを変え、岡田西の南北性の低地は女鳥羽川の自然流路のあとで、岡田町付近が少し高くなっているのは、女鳥羽川がつくった自然堤防と推定される。岡田町西の低地には発掘により河川のあとが見つかることから、9世紀迄は岡田町の西側を女鳥羽川は流れていたと推定され、平安時代中頃の洪水時に急カーブの所で流速が落ち、その結果運搬力を失い、大量の土砂を伊深以南に堆積させ、川自身が堆積させた堆積物にはばまれて、流路を更に東にとらざるを得なくなったものと推定される。

(2) 遺跡付近の段丘について

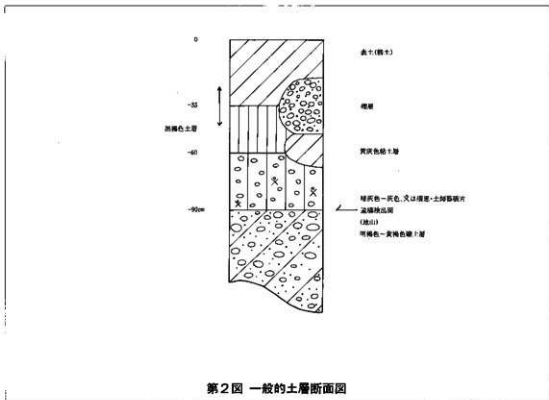
この扇状地は形成後、地盤の隆起により河岸段丘を形成し、右岸に三段の河岸段丘が認められる。この地盤の隆起は断定はできないが、一様なものではなく、西側の方が東側より大きく傾動した可能性もあり、上段から矢作・神沢の第1面、伊深・岡田・反目・中原に至る第2面、現在のはらん原の第3の段丘面に、およそ区別することができる。しかし上述した如く、女鳥羽川が岡田町の西を流れていた古代には、発掘地点から岡田町にかけて左岸の段丘的存在であり、平安時代中頃以後流路が洪水で一気に東へ首を振ったため、左岸の段丘が細長く取り残され、開せきされずに上砂のみ厚く遺跡の上に堆積したものと推定される。したがって、今回発掘された塩辛遺跡は、現在は右岸の第2段丘にあるが、当時(8世紀頃)は左岸の低い段丘上にあったことになる。

(3) 塩辛遺跡の土層について

堆積物は下から、遺跡の基盤となっている黄褐色の礫入りシルトの地山、遺跡を覆う暗灰色～暗灰褐色の砂礫を含む土層が、25～30cmの厚さで載っており、この層は須恵器や土師器の破片を含んでいる。この上は所により地下水で溶脱還元された灰色の粘土層や砂質土層が載っている。これより上は場所により変化しており、腐植の多い黒褐色土層が載るのが一般的であるが、東部は流路の首振りの際に黒色土層が流出し、黄灰色粘土層や礫層が厚く堆積している。この上を表土（耕作土）が深淺の変化を持ちながら、15～40cmの厚さで覆っている。

これらの堆積物は、上流から運搬されてきたシルト・砂・礫と、古い崖すい性堆積物を洪水の際に運んできた腐植に富む黒～黒褐色礫土の混成で、全般にふるい分けは極めて悪いのが特徴であり、保水性が高く、上記のように水による還元溶脱して灰色を呈する層や、溶脱して灰色を呈する部分に溶脱物（主として酸化鉄）が斑状に入り、全体として灰褐色～暗灰褐色を呈する層が存在する。混在する礫の岩質は多い順に、(1)ひん岩、(2)砂岩、(3)安山岩、(4)緑色凝灰岩、(5)その他少々となっており、いずれも上流の第三紀の内村層とそれを貫く火成岩類により構成されている。

当時の生活面は、地山の黄褐色土層の上に暗褐色土が堆積し始めた頃、即ち暗褐色土層の最下部と推定される。



第2図 一般的土層断面図

第2節 周辺遺跡

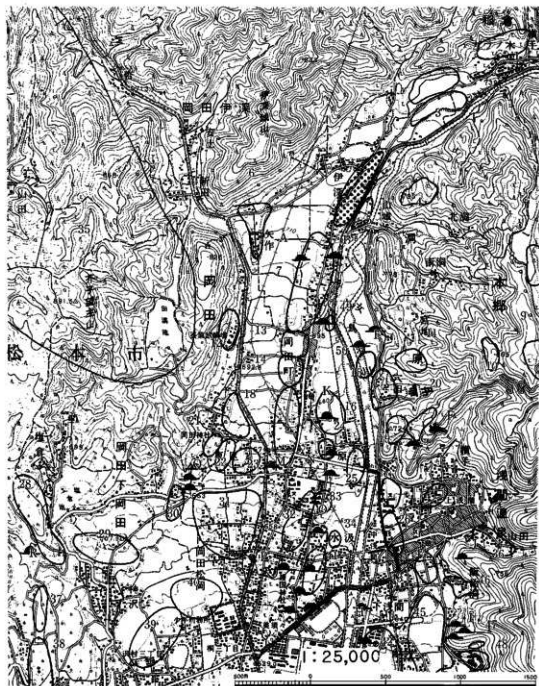
塚幸遺跡は松本市北部山麓一帯に属する遺跡であり、周辺には旧石器時代～中世にかけて多数の遺跡が分布している。しかしながら、発掘調査や資料の紹介が行われている遺跡は少なく、多くは表面採集によって遺物散布地として把握されているに過ぎない。ここでは近年の発掘成果を加えて時期別に岡田地区、及び女鳥羽川流域の本郷地区の遺跡を中心に概観してみたい。

旧石器時代 本郷三才山山腹の渋池より晩期の切出形石器が採集されているだけである。

縄文時代 女鳥羽川の両岸に多くの遺跡が展開している他に、城山の東側山麓・袴腰山の中腹付近等に分布している。早期では渋池のみが散布地として知られていたが、岡田伊深にある矢作（H3年度発掘調査実施）では土坑より楕円押型文土器が出土した。前期では、本郷三才山に渋池・袴腰、洞に不澄池、原に下屋敷、浅間温泉に柳田等がある。中期になると、遺跡数は増え、本郷三才山に芦の田池（美鈴湖）・本村、岡田に田溝池・塩倉池・神沢・峰ノ平、稻倉に和田・鎮守、洞に桶渡し・栗和田、原に下屋敷・五反田、浅間温泉に高田等多数の遺物散布地が、確認されている。最近の主な発掘調査は、岡田では西裏（S54・58・60・H1・3年度発掘調査実施）・欠作、浅間温泉では柳田（S54・H2年度発掘調査実施）、大村では塚田（H2年度発掘調査実施）・立石（H1年度大村Ⅵとして発掘調査実施）等で実施されている。このうち塚田では47軒の竪穴住居址を確認しており、注目される。後期になると数は減少し、浅間温泉には柳田・立石、岡田町に岡田町遺跡（H3年度発掘調査実施）、原に根利尾がある。晩期には大村に原畑、浅間温泉に柳田の2遺跡が確認されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡は松本市東部山地の標高800～1000mに点在する小規模な池の周囲と、山麓～平地にかけて見られる。前者には本郷三才山に渋池・中の沢・・・の瀬、洞に栗和田・雨塚があり、後者には、浅間温泉に柳田・鳥居前・大音寺・柴田、原に西原・五反田、大村に大村遺跡が知られている。発掘調査では、大村の古屋敷（H3年度発掘調査実施）より後期の竪穴住居址17軒が確認されている。

古墳時代 集落址をみると浅間温泉に柳田・真観寺・高田が遺物散布地として知られていたが、発掘調査によって確認された竪穴住居址は岡田の西裏で前期1、中期1、二反田（H3年度発掘調査実施）で前期6、岡田町（H3年度発掘調査実施）で前期3、中期1、大村の古屋敷で中期17、後期9、前田（H3年度発掘調査実施）で前期2をそれぞれ検出した。この地区の古墳は松本市東部山山麓の尾根上、女鳥羽川両岸に分布し、西側の城山山麓にも見られる。浅間温泉～大村の東に迫る山中の尾根上には多数の古墳があり、いままでも発掘調査も行われている。妙義山の丘頂には妙義山1～3号があり、人骨とともに装身具、馬具等が、桜ヶ丘の尾根上にある桜ヶ丘からは金銅製の天冠が出土している。また、浅間温泉の北側には本社峯、茶臼山がある。女鳥羽川両岸には北から山城、中島、高根塚、土取場、塚田、西原、下屋敷、猫塚、塚畑、水汲1～5号、松岡、大屋敷が



壙辛遺跡

第3図 周辺遺跡

周辺遺跡名と主要時期

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. 鎮守 (縄文) | 26. 高田 (縄文・古墳・平安) |
| 2. 和田 (縄文) | 27. 鳥居前 (弥生・古墳) |
| 3. 桜田 (縄文) | 28. 塩倉 (縄文) |
| 4. 高山 (縄文) | 29. 丸山 (平安) |
| 5. 竹之上 (縄文) | 30. 天神の木 (平安) |
| 6. 欠作 (縄文・中世) | 31. 松岡 (古墳・奈良・平安) |
| 7. 岡田町 (縄文・古墳・奈良・平安・中世) | 32. 七日市場 (平安) |
| 8. 栗和田 (縄文・弥生・古墳) | 33. 杵坂 (縄文・平安) |
| 9. 雨堤 (縄文・弥生・古墳) | 34. たて (縄文・平安) |
| 10. 小河清水 (縄文・古墳・平安) | 35. 北部古窯址群 (奈良・平安) |
| 11. 穴田峯 (古墳・奈良・平安) | 36. 大音寺 (縄文・弥生) |
| 12. 向山 (平安) | 37. 神沢 (縄文) |
| 13. 二反田 (古墳・奈良・平安) | 38. 峰の平 (縄文) |
| 14. 下出口 (古墳・奈良・平安) | 39. 狐塚 (平安) |
| 15. 穴田前 (古墳・奈良・平安) | 40. トウコン原 (縄文・弥生・奈良・平安) |
| 16. 宮の上 (平安) | 41. 西原 (縄文・弥生・古墳) |
| 17. 西裏 (縄文・古墳・奈良・平安) | 42. 大輔原 (縄文・平安) |
| 18. 宮の前 (奈良・平安・鎌倉) | 43. 柳田 (縄文・奈良・平安) |
| 19. 北ノ久保 (縄文) | 44. 新湯南表 (縄文) |
| 20. 根利尾 (縄文) | 45. 大村 (奈良・平安) |
| 21. 岡田神社裏 (平安) | 46. 真観寺 (古墳・平安) |
| 22. 堰ノ内 (平安) | 47. 新切古窯址群 (古墳) |
| 23. 田中 (平安) | 48. 新切 (古墳・奈良・平安) |
| 24. 下屋敷 (縄文・平安) | 49. 原畑 (平安) |
| 25. 五反田 (弥生・古墳・平安) | 50. 塚田 (縄文・平安) |

古墳名

- | | | |
|-------|------------|-----------|
| A 中島 | G 茶臼山 | M 猫塚 |
| B 山城 | H 大屋敷 1・2号 | N 塚畑 |
| C 高根塚 | I 妙義山 1～3号 | O 水汲 1～5号 |
| D 土取場 | J 桜ヶ丘 | P 松岡 |
| E 塚田 | K 西原 | Q 欠崎 |
| F 本社峯 | L 下屋敷 | R 塚山 |

ある。このうち、水汲1～5号は円形の積石塚である。積石塚としては市内里山辺の薄町にある古墳群に於いて方形のものが多くとされており、朝鮮からの渡来人の墓と考えられている。水汲1～5号は円形ではあるが、その構築方法がいずれも土石混合であることから関連性が指摘されている。西側の城山山麓には、矢崎古墳、塚山古墳がある。古窯址は、東山山麓妙義山中に新切古窯址があり、後期の須恵器が出土している。

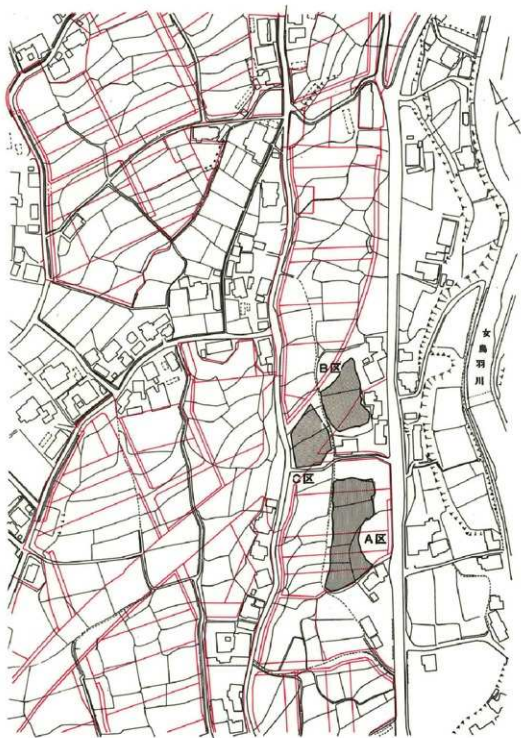
奈良・平安時代 奈良・平安時代集落址の遺跡数は多く、女鳥羽川東側に穴田峯、高田、大村、柳田、大輪原、古屋敷等がある。発掘調査に於いて柳田では奈良時代の竪穴住居址1軒を確認し、大輪原（H1年度大村Vとして調査実施）では、奈良時代の大形住居址1軒を検出し円面硯を得ている。また大村では、S40年からH1年の間7回に及ぶ発掘調査が行われ、合計50に及ぶ竪穴住居址を確認した。女鳥羽川の東側には岡田町、二反田、下出口、岡田神社、向山、西裏、宮の前、宮の上、松岡、トウコン原、狐塚等があるが、近年の圃場整備事業や宅地化に伴って、発掘調査が数多く実施されている。確認された竪穴住居址は岡田町で約100、二反田1、西裏53、宮の前（H2年度発掘調査実施）31、宮の上（H3年度発掘調査実施）3を数える。宮の前では大形1を含め建物址6を検出した。ここで注目されるのは西裏、宮の前、岡田町で検出された土師器焼成坑と、大村、宮の前、岡田町から古瓦が出土した事である。西裏では竪穴住居址の近くに土師器焼成坑が多数確認された。住居址のピット内に粘土が貯蔵されていた例も多く、土師器製作集団の集落址と推定される。松本市内で最も多量の古瓦が出土する大村は、古くより注目されていた。寺院に関連のある地名が残っている事もあり、大銅氏の氏族の寺院・官衙があったのではないかと考えられていたが、古瓦を葺いていた建造物は検出されておらず、今後の調査に期待したい。古窯址には南西に北部古窯址群があり、豊科町の上の山・菰浦平古窯址群とは一連のものと考えられている。地形的には山中丘陵の緩斜面に位置し、付近には第三紀層の良質な粘土が露出し、水にも恵まれている。遠藤藤麻呂、中島豊晴、河西清光氏らにより調査が行われ、須恵器・土師器・古瓦などが出土し、奈良時代末～平安時代前半にかけての須恵器を中心とした生産地と考えられている。

主要参考文献

長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全一巻(1) 遺跡地名表』

東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌(2) 歴史(上)』

長野県企業局・松本市教育委員会 1979 『松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査報告書』



第4図 調査位置

0 50 100m

(1 : 3000)

第3章 調査

第1節 調査の概要

1. 調査方法

本遺跡は松本市の北部にあり、岡田・洞・稲倉の3地籍にまたがっている。今回の調査地は湧地籍に属し地番は割240他である。県営圃場整備事業に伴う今回の発掘調査は、長野県道路公社による国道254号線建設事業（松本市大字岡田～島内）に伴う発掘調査と並行して行われた。調査方法は全体の流れに従っており、非効率な点もある。調査結果についても塩辛遺跡全体の評価に基づいて行っている為、本調査の範囲内では把握できない点についても言及する事もあるかと思うが予め承いいただきたい。本遺跡は周知の遺跡であり、S46年には原嘉藤、倉科明正氏によって調査が行われ、縄文時代中期の土器が確認されている^{註①}。圃場整備事業の予定地のうち遺跡の範囲にかかる面積が約40,000㎡と広いため先に試掘調査を行った（H2年3月実施）。試掘調査は予定地内の15ヵ所で行ない1.2×1.2mの方形の試掘坑を設定して掘り下げた。その結果ほとんどの試掘坑に遺物が認められたが、予定地の北東部に竪穴住居址、ピットを確認することができた。この為本調査では北東部に調査区を設定しA区とした。A区の実質調査面積は2,340㎡である。なお国道建設に伴う調査ではA区北側にB区・C区を設定している。表土除去は重機によって行い、現況の水田地表下を約35～100cm程掘り下げた。遺構の検出は人力によって行い、その命名については検出作業終了後に遺構の性格を推定して付した。この為掘り下げ開始後に他の遺構と判断したものもあり、遺構番号が欠番になっているものもある。又、国道建設に伴うB区、C区の調査についても開発原因が異なるために別々の報告となるが、本来一つの遺跡であり、一連の遺構番号を付けた。平面の測量については、A区北側に任意に設定した基準点から南北・東西に基準線を振り出し、更にそこから3m間隔に直交する線を振り出し、B区、C区を含め調査地全体を3m方眼で覆った。調査地区内の求める位置は、基準点からの方向と距離で求められる。標高については各地区に埋設した杭と求める地点との比高差をもって算出した。各遺構の掘り下げは竪穴住居址・竪穴状遺構は土層観察用の土手を十字に残して掘り下げ、土層観察を行った後に取り除いた。土坑、ピット、遺構に伴う施設などは2分割し、まず半分を掘り下げ、土層観察後に全掘した。建物址についてはまず各ピットの掘り方全体を数cm掘り下げて、柱痕の観察を行った。その後2分割して半分を掘り下げ、土層観察を行い完掘した。

註① 本郷村文化財審議委員会 1972『本郷村文化財調査資料（7集）塩辛遺跡緊急調査概報』が刊行されている。

2. 調査結果

①遺構 今回の調査で確認された遺構は下記の通りである。

竪穴住居址	27軒（縄文時代中期15、古墳時代末期1、奈良時代6、平安時代4、不明1）
建物址	11棟（古墳時代末期4、その他不明）
竪穴状遺構	3個（縄文時代中期）
土坑	31個（縄文時代中期3、奈良時代～平安時代6、その他不明）
ピット	425個（縄文時代中期1、古墳時代末期1、その他不明）

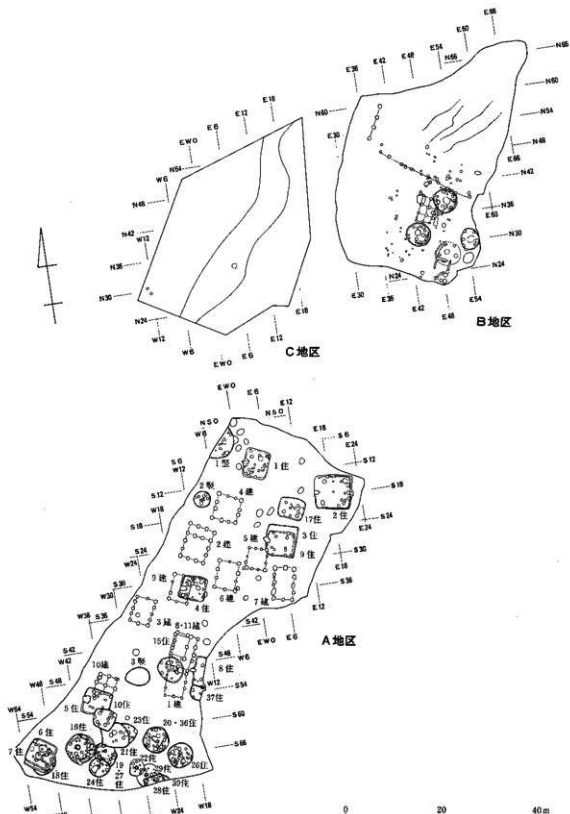
②遺物 竪穴住居址を中心として各種遺構、遺構包含層から土器、円面硯、土製品、石器、鉄器等が出土している。

縄文土器	中期中葉の藤内II式、中期後葉の曾利I～V式、後期の注口土器等
土師器	古墳時代末期～平安時代（1～6期） ¹¹⁾ の坏、甕等
須恵器	古墳時代末期～平安時代（1～6期）の坏、壺、甕、壺類等
円面硯	長方形の透かしあり。内境が非常に低い。海が浅い。（3～4期）
土製品	土偶、土製円盤等（縄文時代中期）
石器	石鏃、石錐、ピエス・エスキュー、スクレーパー、打製石斧、凹・蔽・磨石、石皿、石棒、砥石等（縄文時代中期、奈良時代）
鉄器	紡錘車、鉄斧、環状製品等（古墳時代末期～平安時代）

③成果

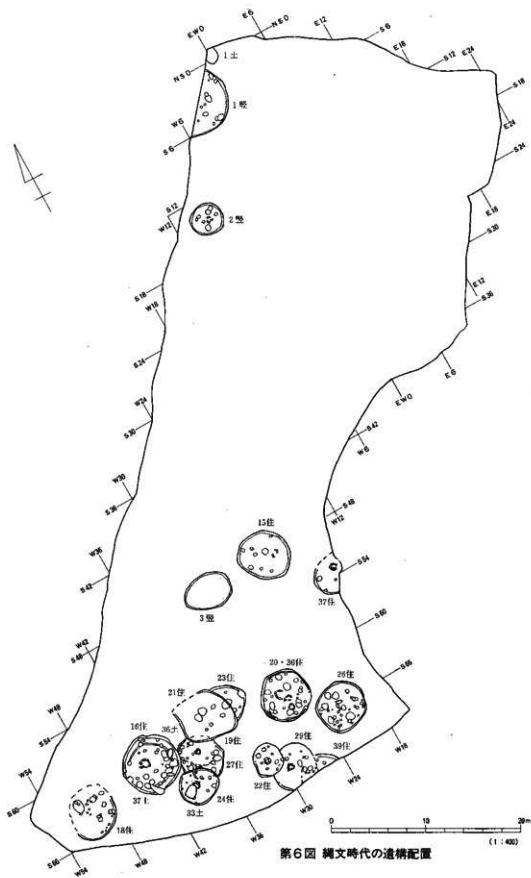
- ・縄文時代中期後葉の集落の一部が検出されたこと。
- ・古墳時代末期～奈良時代の竪穴住居址が検出されたこと。
- ・古墳時代末期～奈良時代のもと思われる建物址群11棟が検出されたこと。
- ・奈良時代前期の竪穴住居址より円面硯を得たこと。

注11) 古墳時代末期～平安時代の時期については（財）長野県歴史文化財センター 1990 『中央自動車道長野線 歴史文化財発掘調査報告書4 総論編』の編年に従った。



第5図 調査区全体図

(1:800)



第6図 縄文時代の遺構配置

第2節 遺構

1. 竪穴住居址

(1) 縄文時代

① 第15号住居址 (第7図)

遺構 調査地区の南側中央S46~51、W18~24に位置し、第1号・第8号建物址に切られる。地山の暗褐色土中に礫が多く混入する範囲として、本址を検出した。規模は長軸5.6m、短軸4.9mを測り、やや東西に長い。平面形は楕円形を呈し、床面積は22.0㎡を測るものと予想する。壁はなだらかに掘り込まれており、残存壁高は22cmであった。主軸方向はN-49°Eを示す。覆土は多量の河原石が混入している暗褐色土である。50cmを超える大きい礫もあった。南東部に10~30cm大、北西部には5~10cm大の河原石の分布がある。床面は多量の礫を含むため細かな起伏があり、北から南へ傾斜している。炉は本址中央東側に設けられていた石囲炉である。残存状況は非常に良好で、構築材には自然石を用い、いずれも平坦な面を上に向け、四方を囲っている。厚いものは20cm以上もあった。規模は80×60、-60cmを測り、遺物・礫ともに多量である。ピットは総数9個検出された。そのうちP₁とP₂は柱痕を確認しており、主柱穴に相当する。埋藏は南東部より発見された。縄文時代中期後半の深鉢が正位に埋設され、中は3~5cmの礫を含む暗褐色土で満たされていた。

遺物 土器の量は非常に少ない。石器には石皿1がある。本址の時期は縄文時代中期後葉曾利IV式後半~V式期に比定される。

② 第16号住居址 (第8図)

遺構 調査地区の南西隅S58~65、W39~45に位置し、第36号・第37号土坑に切られる。本址は重機による表土除去後に水没していた部分にあたり、厳寒のため凍りつくという最悪の条件の中で検出された。円形のプランを呈し、長軸6.2m、短軸6.0mの規模をもち、N-55°Wの主軸方向をとる。暗褐色土を呈する覆土は8cmと薄いが、地山との区別は容易になされた。床面は黄褐色粘質土の二次堆積ロームを固めたものであり、平坦で非常に堅く、床面積は28.8㎡を測る。炉は石囲炉で、本址中央西側にあり、残りは良好である。規模は97×88cmと大きく、底面は焼けている。炉を中心として、二重の割溝が巡って、確認されている。ピットは全部で29個発見された。内側の周溝を切る形で検出された主柱穴があることから、この住居が拡張されたものと考えたい。

遺物 出土土器の量は少ない。石器には磨石類が4点ある。本址の時期は出土遺物より、縄文時代中期後葉曾利II式期に比定される。

③ 第18号住居址 (第9図)

遺構 調査地区の南西隅S50~66、W48~53に位置する。検出は水没・凍結の中ではあったが、比較的容易になされた。本址上のほとんどに第6号・第7号住居址が乗っているが、下部までは破

壊されていなかった。規模は復元推定で長軸5.9m、短軸4.8mの楕円形を呈し、現況での床面積は4.4㎡を測る。覆土は暗褐色土で炭化物が混入していた。壁高は20cm、確認された範囲では直に掘り込まれていることがわかり、直下に周溝が巡る。床面は二次堆積ロームの黄褐色粘質土で、平坦・堅固、礫なども含まない良好な状態であった。ピット28個が検出されている。そのうちP₁とP₂は柱痕を確認しており、柱穴と考える。炉の痕跡はみられなかったが、南東隅で埋塞が確認されており、これを住居への入口と考え、主軸方向はN-61°-Wとなる。

遺物 出土した土器の量は非常に少ない。石器には石鏃3、石錐1、磨製石斧1がある。本址の時期は、縄文時代中期後葉曾II式期と推定する。

④ 第19号住居址・第27号住居址（第15図）

遺構 調査地区の南端S61-66、W35-40に位置し、第16号住居址に隣接する。第27号住居址は北東隅を第21号住居址に切られ、第19号住居址は南西を第24号住居址に切られる。表土が泥化したなかでの作業であったため、検出は困難を極めた。掘り下げ途中で炉が半壊された状態で発見され、2軒の重複（19住は27住に切られる）であると判断した。

19住は長軸が推定5.1m、短軸4.6mの楕円形を呈し、床面積は現況11.9㎡を測る。残存壁高は11cmであった。覆土は礫混入黒褐色土の単一層である。炉は北半分を27住に破壊されているが、石の並びから見て、石囲炉とした。本址の中央に設けられている。規模85×47cmで、焼土が残っていた。主軸方向をN-156°-Wにとる。一方の27住は推定規模4.1×2.1m、現況床面積8.7㎡を測る楕円形を呈す。残存壁高は12cmである。覆土に19住と大きな差は見られなかった。炉は本址中央に位置する。やや小形の石囲炉で57×55cmを測り、四方に石が残っていた。炉外東側に焼土の拡がり（53×40cm）がある。主軸方向はN-40°-Eを指す。床面の高さでは双方の住居に差ははく、ほとんど同レベルといってよい。27住の床面は平坦で非常に堅く良好であるが、二次堆積ロームの黄褐色土である南部に対して、北部は暗褐色土を呈しており、礫が多量に露出しているという違いが見られた。また19住の南壁際に小規模ではあるが周溝が巡っている。ピットは27住に伴うとみられるものが5個、19住が21個である。後者では柱痕を確認している。P₁~P₆が柱穴に相当しよう。

遺物 出土した土器の量は非常に少ない。中期中葉のものが主体である。ただし土器を見る限り、19住と27住に時期差は認められず、同一時期内での切り合い、もしくは1軒の住居址を2軒の切り合いと捉えたものである可能性も高い。石器には石鏃3、石錐1、ピエス・エスキューユ1、磨石類5がある。本址の時期は双方とも縄文時代中期中葉藤内II式期と推定する。

⑤ 第20号住居址（第10図）・第36号住居址（第9図）

遺構 調査地区の南部S60-65、W24-29に位置する。重機での表土削平した際、明瞭に検出された住居である。しかし周囲の遺構検出のため、更に20-30cm削り込んだ。本址は掘り下げ過程において、炉址が3基確認されている。切り合い関係は判然としなかったが、本址中央に位置する2基の炉が一辺を共有しているような形態をもつこと、また二重の周溝が巡り、内側のものを壊すよ

うにピットが並んでいることなどから、住居拡張が行なわれたと考えられる。更に南部にあるP₂₂を切る石囲炉(65×56cm)を本址より新しい住居址(第36号住居址と命名)のもの(第9図・炉のみ)と判断した。規模は建替前で4.2×3.9m、床面積12.3㎡(推定)を測り、拡張後は5.4×5.2m、22.7㎡で、平面形はいずれも円形を呈する。残存壁高18cmで、覆土は黒褐色土の単層であった。床面は粘質の暗黄褐色土(二次堆積ローム)の比較的堅い状態である。P₁~P₂₂のピットが見ついている。中でも内側の周溝を切るP₁~P₄・P₂₂は良好な柱痕を観察しており、拡張後の主柱穴と考えた。炉は前述のように2基ある。双方とも石囲炉で、それぞれの規模は84×77cm、94×92cmを測る。後者の方が良好な状態で、底には深鉢の破片を内面を上にして二重に敷き詰めていた。これを拡張後の住居に伴うものとした。これらの配置から、それぞれの主軸はN-125°-E、N-54°-Wとなる。

遺物 土器量は少ない。石器にはスクレーパー1、打製石斧3、磨石類4がある。20住の時期は縄文時代中期後葉曾Ⅳ式後半~Ⅴ式期と推定される。なお36住の時期は遺物がなく、不明である。

⑥ 第21号住居址(第11図)

遺構 調査地区の南部S57~63、W32~38に位置し、第23号・第27号住居址を切り、北隅を第10号住居址に切られる。規模・平面形は長軸推定6.3m、短軸0.0m、現況床面積23.5㎡を測り、不整楕円形を呈する。覆土は礫が多量に混入する暗褐色土で、ややなだらかに掘り込まれた壁は最大高12cmを測る。床面は覆土と同様の暗褐色土であるが、礫が多くやや明るい。比較的堅固で、小礫を含むため、細かな起伏がある。施設はピット3個が検出されたが、柱穴とは考い難い。炉は本址中央やや東寄りに設けられていたようであるが、構築材は抜き取られており、大きく深いピットがあるのみであった。被熱した様子もなく、焼土は確認されていない。109×101cmを測る。10住と切り合う部分に埋壁がある。深鉢を正位に埋設しており、土器には底がない。土器の縁と底にそれぞれ2個の平石がある。掘り方の土中にも礫が多量含まれ、土器を支えているようにも見えた。

遺物 石器には石鎌1、打製石斧3、出土した土器は微量であるが、所属時期は縄文時代中期後葉曾Ⅳ式後半~Ⅴ式期と推定される。

⑦ 第22号住居址・第29号住居址(第12図)

遺構 調査地区の南端S65~70、W27~33に位置する。29住は22住に北東を、28住・39住及び第34号土坑に南部を切られる。

22住は長軸3.5m、短軸3.1mを測る楕円形を呈し、床面積は9.0㎡を測る。遺構は礫層中に暗褐色土が混入する地山で把握したが、検出は比較的容易であった。壁はややなだらかに掘り込まれており、最大壁高は10cmであった。覆土は礫混入暗褐色土、床面も同様であるが、礫が多量で、起伏があり、堅い。炉は中央に作られており、石囲炉である。四方を4個の大きな石で組み、77×55cmを測る。主軸をN-78°-Wにとる。ピット8個が発見されているが、主柱穴等に相当するものはなかった。一方29住は重機による表土除去段階で暗黄褐色土(二次堆積ローム)の床面まで達していた

住居址である。5.1×3.5mの円形プランで、現況床面積10.2㎡を測る。炉を確認したため、周囲を精査し、周溝の一部とピット6個を検出した。炉は石囲炉である。67×67cmの炉内中央に小さな深鉢が埋設されていた。主軸方向はN-58°-Eを示す。

遺物 22住の土器は比較的多い。石器は22住の磨石類1点のみである。時期は22住・29住ともに、縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期と推定される。

⑧ 第23号住居址(第13図)

遺構 調査地区の南部S58-62、W30-33に位置し、第21号住居址に西側を切られる。平面形は不整形を呈すものと推定される。規模は長軸方向で4.5m、短軸3.8m、現況床面積6.0㎡を確認した。壁はやや外傾しており、壁高は最大でも10cmを測るのみである。覆土は単層で、小礫の混入する暗褐色土である。暗褐色土の床面は礫混入のため小起伏があるが、概ね平坦で、比較的堅く良好な状態であった。住居内の施設はP1~P4のピットが確認されているものの、位置・規模からみて主柱穴とは考え難い。炉は中央に検出された穴(P5)を当て、石は抜き取られたものとする。しかし被熱の様子が窺えなかったため、炉の可能性があるとこの程度にとどめたい。

遺物 出土土器の量は少なく、石器はない。時期は縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期と推定される。

⑨ 第24号住居址(第13図)

遺構 調査地区の南端S64-68、W37-41に位置し、第33号土坑に切れ、第19号住居址を切る。本址は降雪等で度々水没した住居址である。規模・平面形は長軸4.6m、短軸4.3mの円形を呈し、床面積は14.7㎡を測った。覆土は砂礫混入褐色土である。床面は二次堆積ロームで粘性がある。平坦であるが、軟弱であった。最大壁高は12cmを測り、壁直下には周溝が設けられている。ピットは9個検出された。P1~P4に柱痕が観察され、柱穴と考える。また炉は中央に設置されており、西側を33に壊されているが、規模115×72cmを測る石囲炉である。主軸はN-66°-Wにとる。

遺物 出土した土器の量は比較的多く、礫とともに西側に集中していた。中期後葉のものが主体となる。他には中期中葉のものも混入している。石器には石鎌3、磨石類1がある。時期は縄文時代中期後葉曾利Ⅱ式期と推定される。

⑩ 第26号住居址(第14図)

遺構 調査地区の南東隅S64-69、W20-24に位置し、第20号住居址と隣接する。本址周辺は地山が礫を含まない二次堆積ロームであるため、検出は容易になされた。しかし降雨による水没が原因で凍結してしまい、掘下げは困難を極めた。長軸5.4m、短軸5.1mを測る円形プランを呈する。主軸方向をN-49°-Wにとり、床面積は21.7㎡である。壁はなだらかに掘り込まれており、最大高14cmを測る。暗褐色土を呈する覆土下層には礫が見られた。黄褐色土の床面は平坦で堅固である。炉は中央にある。石囲炉であつたらしいが、石はなく、抜き取られたものとする。ピットは多く、36個が検出された。そのうちP1~P4は位置からみて、主柱穴と考えてよいであろう。またP5からは、復元可能な深鉢を得ている。また本址東壁を切るP6の中には埋設土器があり、正位に

埋められていた。

遺物 出土した土器の量は少ない。石器も磨石類1のみである。本址の時期は縄文時代中期中葉藤内Ⅱ式期と推定される。

⑪ 第37号住居址(第16図)

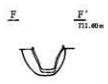
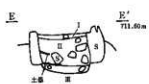
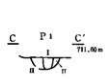
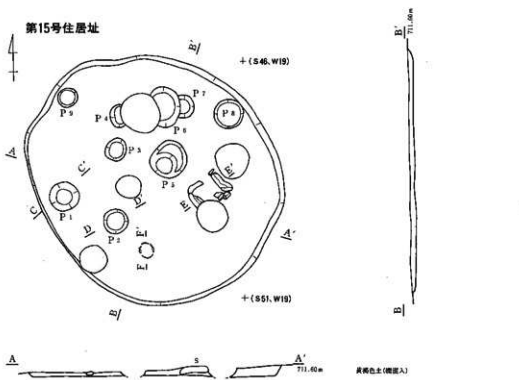
遺構 調査地区の南東部S52~56、W14~17に位置し、第8号住居址に北側を切られる。本址東側が排土置場になっていたこともあって、もっとも水はけの悪いところで、常に水汲みを伴うため、作業は大変であった。検出時にプランが確定できず、サブトレンチを設定して確認した。東部は区域外になるため調査不能で、平面形は不明だが、円形となろうか。現況規模は長軸方向で4.1m、短軸2.5m、床面積7.2㎡を確認した。壁はやや外傾しており、最大30cmを測る深いものであった。覆土は褐色土であるが、上層は小礫が多量に混入していた。暗褐色土の床面は砂礫が多量に混入しており、起伏があるが、比較的堅く良好な状態であった。住居内の施設はビットが3個確認されている。柱痕を観察したことからP1、位置からP2が主柱穴と考えられる。炉は区域外にかかっていたため、その部分だけ掘り込んで調査した。規模94×78cmを測る石囲炉で、構築材には板状の砂岩の山石を立てて用いている。炉内覆土の上層には多量の河原石が含まれており、また底面から横倒しになった深鉢が出土した。主軸方向をN-48°-Eにとる。

遺物 出土した土器の量は比較的少ない。時期は縄文時代中期後葉曾利Ⅳ式後半~Ⅴ式期と推定される。

⑫ 第39号住居址(第17図)

遺構 調査地区の南東部S70~72、W25~30に位置し、第28号住居址が上面に乗り、第29号住居址を切る。表土削平後水没・凍結したため調査は困難であった。本址は小礫が混入する暗黄褐色土に掘り込まれている。大部分が区域外にかかるため、平面形は不明だが、円形と思われる。現況5.0×1.4m、床面積5.6㎡を確認した。壁高12cmを測り、覆土は暗褐色土を呈する。床面は暗黄褐色土で、28住の床山下に周溝の底が見えた。ビットは8個あり、P1・P2で柱痕を観察した。炉は区域外にあるものと判断した。

遺物 本址に伴う遺物はなく時期決定は困難である。



- I : 黄褐色土
- II : 褐色土(微混入)
- III : 暗褐色土(微多量混入)

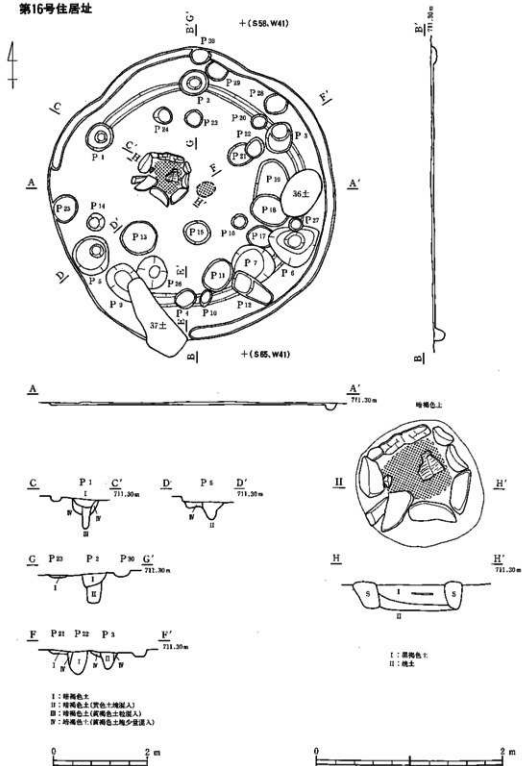
- I : 黄褐色土(少量微混入)
- II : 暗褐色土(微多量混入)
- III : 暗褐色土(微多量混入 - 砂質)

暗褐色土(少量混入)



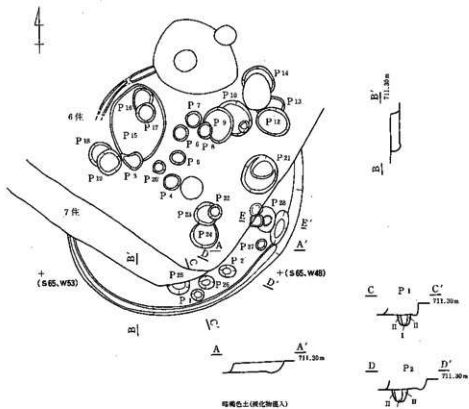
第7图 第15号住居址

第16号住居址

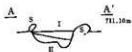


第8图 第16号住居址

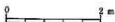
第18号住居址



第36号住居址 炉址

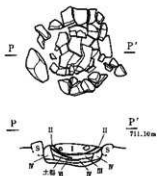
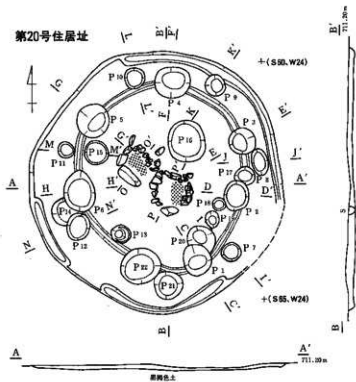


I : 母褐色土(地土・細砂混入)
II : 褐色土(黄色土粒多混入)

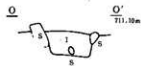
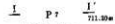
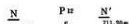
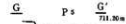
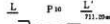
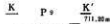
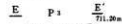
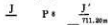
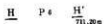
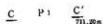


第9图 第18号・第36号住居址

第20号住居址

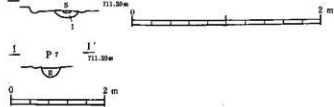


- I : 赤褐色土 (少量少量混入)
- II : 暗褐色土 (黄色土少量混入)
- III : 赤褐色土 (暗土少量混入)
- IV : 黄褐色土 (暗土少量混入)
- V : 暗褐色土 (赤褐色土少量混入)
- VI : 黄褐色土 (暗褐色土少量混入)

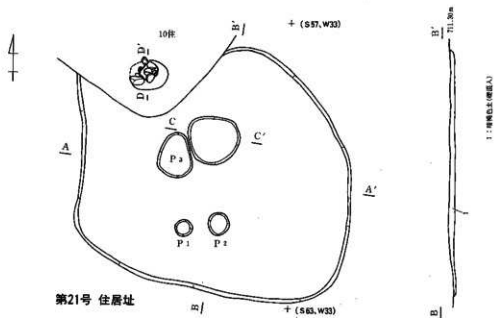


- I : 赤褐色土 (少量少量混入)

- I : 赤褐色土
- II : 暗褐色土
- III : 暗褐色土 (黄色土少量混入)
- IV : 黄褐色土
- V : 赤褐色土 (少量少量混入)
- VI : 暗褐色土 (少量混入)
- W : 黄褐色土
- X : 暗褐色土 (少量少量混入)



第10图 第20号住居址



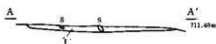
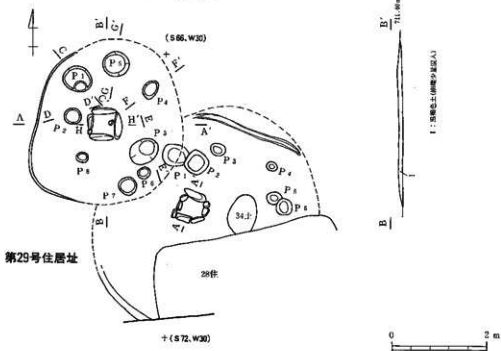
1: 埋藏土(埋藏人)
 2: 埋藏土(不埋藏人)
 3: 埋藏土(埋藏土+小埋藏人)

埋藏土:



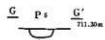
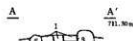
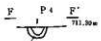
第11图 第21号住居址

第22号住居址



22住 炉

29住 炉



加腐色土 (焼土跡埋込人)

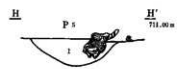
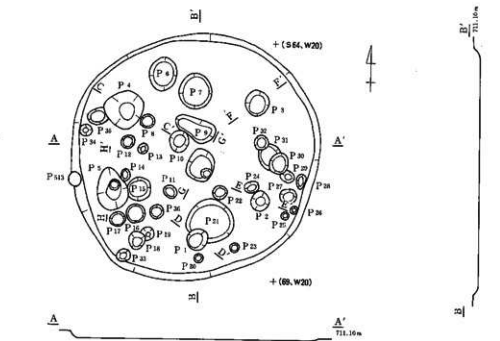
I : 加腐色土
II : 褐色土

- I : 加腐色土
- II : 褐色色土
- III : 褐色土
- IV : 加腐色土 (1層より中層へ)



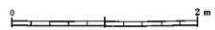
第12图 第22号・第29号住居址

第26号住居址



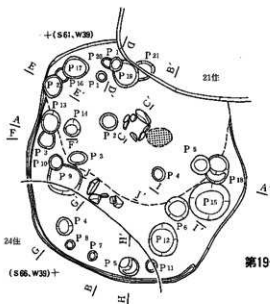
- I : 暗褐色土(黄色土粒少量混入)
- II : 暗褐色土(黄色土粒、炭化物少量混入)
- III : 黄褐色土(黄色土粒、炭化物少量混入)
- IV : 暗褐色土(黄色土粒少量混入)

I : 暗褐色土(黄色土粒少量混入)



第14图 第26号住居址

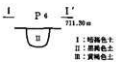
第27号住居址



第19号住居址



I: 黄褐色土(灰色土層部人)
I': 黄褐色土(灰色土層部埋入)

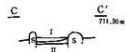


19住 炉址



黄褐色土(小埋入跡部)

27住 炉址

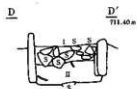
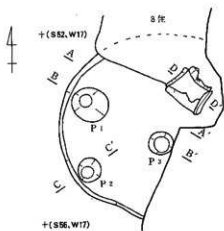


I: 黄褐色土
II: 黄土



第15图 第19号・第27号住居址

第37号住居址



I : 赤褐色土 (陶器やて多量混入)
II : 暗褐色土 (灰褐色土に砂少量混入)



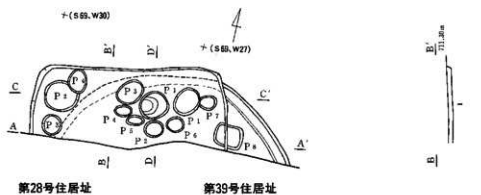
I : 褐色土 (小礫多量混入)
II : 褐色土



I : 赤褐色土
II : 暗褐色土 (灰褐色土混入)
III : 暗褐色土



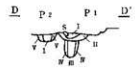
第16图 第37号住居址



I: 暗褐色土
I': 暗褐色土



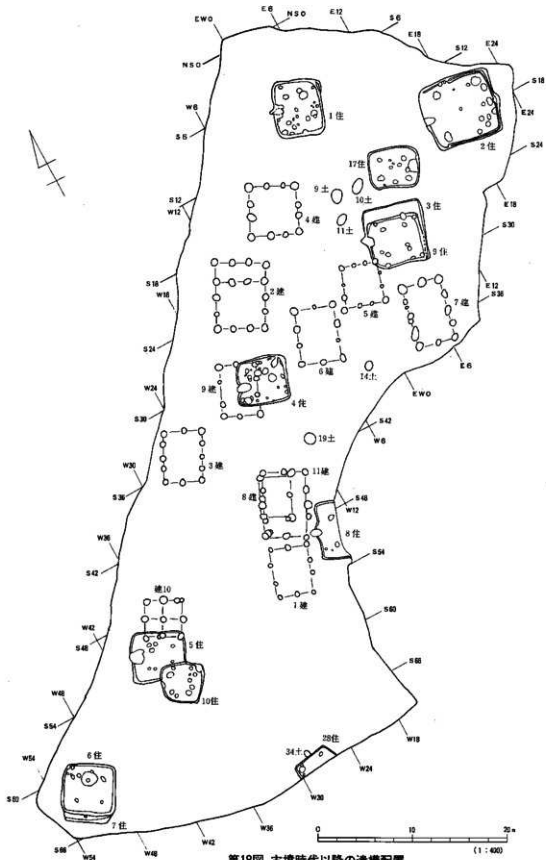
I: 暗褐色土
II: 暗褐色土(黄褐色土较多层段)
III: 褐色土(黄褐色土较多层段)



I: 暗褐色土
II: 褐色土(砂质)
III: 褐色土
IV: 褐色土(黄褐色土较多层段)
V: 暗褐色土



第17图 第28号·第39号住居址



第18図 古墳時代以降の遺構配置

(2)古墳時代以降

① 第1号住居址 (第19・27図)

遺構 調査地区北端S4~12、E1~7に位置する。主軸をN-67°-Eにとり、規模は南北6.8m、東西5.1mを測る。平面形は隅丸長方形を呈している。壁高は29cmを測り、その掘り込みはややなだらかである。覆土は黒褐色、暗褐色の順で堆積していた。床面には礫を含む黄褐色二次堆積ロームをそのまま用いていた。壁下を除き平坦であるが、地形にあわせて北から南にかけて緩やかな傾斜をもつ。その面積は30.0㎡を測る。施設にはピット25個、カマド、周溝が確認されている。ピットはP₁~P₄が規模・位置的にみて支柱穴と推定されるが、それぞれ2個の柱痕が確認でき、同じ位置に建て直しが行われたのであろう。北壁の中央下に位置する粘土カマドは燃焼部火床奥から52cmの長い煙道が付いている。周溝は壁直下に確認されたが、北東コーナーではやや内側を巡る。

遺物 土器、石器が出土している。土器は土師器、須恵器がある。土師器には内黒・赤彩の坏、甕、須恵器には坏、蓋、短頸壺等があり、良好な資料である。石器(石鏃・打製石斧)は縄文時代のもので、混入品であろう。本址は古墳時代末期、1期に属する。

② 第2号住居址 (第20図)

遺構 調査地区の北側S13~21、E14~23に位置し、ピット19に切られる。礫の多量に混入する黄褐色土中に掘り込まれており、検出時には2軒の住居址の切り合いとして捉えていた。掘り下げが進むにつれ、単なる土層の変化と判明した。規模は南北7.1m、東西8.1mを測り、方形のプランを呈す。床面積は53.2㎡を測る。主軸方向はN-81°-Wを示す。検出面からの残存壁高はそれぞれ北壁38cm、南壁20cm、東壁19cm、西壁34cmを測り、概ね緩やかに掘り込まれている。覆土には、焼土塊の混入する暗褐色土が堆積していた。床面は小礫が含まれてはいるが、比較的堅く平坦であった。施設はピットが14個、カマド、周溝が確認されている。P₁~P₄はその規模・位置からみて支柱穴と考えられるが、このうちP₂・P₄には直径60cm程の河原石を上面が平坦になるように埋設しており、礎石として利用していたものと考えられる。P₁・P₃には河原石は無く、柱痕も確認されなかったが、本址の廃絶時にもち去られたかもしれない。その他のピットの性格は不明であるが、東側に数多く見られる。カマドは新旧2ヶ所にある。新カマドは西壁中央下に構築された石組みカマドだが、残存状況は悪く、袖石が僅かに残るのみである。煙道も検出されなかった。旧カマドは東壁中央に壁を半円形に掘り込んで作られているが、破壊されている。焼土塊が見られるのみで詳しくはわからない。新カマドと同様に煙道は検出されなかった。周溝は新カマドのある西壁を除いて検出された。幅20~30cm、深さ5~10cmを測り断面半円形を呈す。

遺物 土器、石器、鉄器が出土した。土器は土師器と須恵器である。土師器は坏、甕、須恵器は坏、広口甕などの器種がある。石器は混入品であろう。遺物より本址の時期は2期に属する。

③ 第3号住居址 (第21図)

遺構 調査地区の東側S22~30、W3~10に位置し、第5号建物址のP₄に切られている。大型

住居址1軒として、プランを認識していたが、掘り下げが進むにつれ、南側で第9号住居址を九ごと貼っていると判明した。規模は南北6.6m、東西6.5mを測る。方形を呈し、主軸方向はN-75°-Wを指す。壁は南西隅部分でかなり緩やかに掘り込まれ、全体的にみても傾斜をもつ。検出面からの深さは16-22cmを測る。覆土は小礫が混入する黒褐色土であった。床面は粘質の小礫を含む二次堆積ロームで堅く良好な状況であったが、第9号住居址を貼る部分の床面では暗褐色土を用いており、あまり堅さはない。施設はピットが4個とカマドが確認されている。P₁~P₄は規模・位置的にみて主柱穴と推定される。カマドは残存状況が悪い。西壁の中央を掘り込んで構築された石組みカマドには、煙道は検出されなかった。本址は第9号住居址と時期差も少なく、或いは、本址は第9号住居址の拡張プランと捉えるべきかもしれない。

遺物 土器、石器、鉄器が出土している。土器はすべて須恵器で坏、蓋、短頸壺、甕がある。石器は打製石斧であるが混入品であろう。土器よりみて、本址は4期の住居址と考えられる。

④ 第4号住居址 (第22図)

遺構 調査地区の中央、S30-36、W10-17に位置し、第9号建物址を切り、ピット138・139・234・235に切られる。規模は東西5.7m、南北5.0mを測り、長方形を呈する。床面積は26.4㎡である。主軸方向はN-70°-Wを示す。壁は緩やかに掘り込まれ、その高さは33cmを測る。床面は礫が混入しているが、地山の二次堆積黄褐色ローム土を平坦・堅固なものにしていた。発見されたピットは27個(P₁~P₂₇)を数える。このうち西側に並ぶP₁・P₂には直径35cm程の河原石を上面が平坦になるように埋設しており、礎石として利用していたものと考えられる。しかしながら東側にはP₁・P₂に対応するピットが検出されなかった。周溝は小規模なもので、カマドのある東・西壁では北端に、南壁では中央にそれぞれ長さ1.3m、深さ8cm程掘り込まれていた。カマドは西壁中央やや南寄りに位置する。壁を掘り残して内側に石組みカマドを構えている。両袖の礫が残され、燃焼部火床は被熱焼土化し手前は大きく窪んでいる。奥壁は急に立ち上がり、煙道は確認されなかった。本址の覆土は、黄色土塊の混入する黒褐色土で、直径20cm大の円礫を中心とした多数の石を含み、それらに混じって土器・鉄器などの遺物がみられた。そのうち北東部からは、床面より10cm程浮いた状態で円面礫がみつまっている。

遺物 土器、石器、鉄器、円面礫などの種類がある。土器には土師器と須恵器がある。土師器には坏、甕、須恵器には坏、蓋などの器種がみられる。鉄器は鉄斧である。円面礫には長方形のすかしがある。石器は混入品であろう。土器からみて、本址の時期は3-4期に属する。

⑤ 第5号住居址 (第23図)

遺構 調査地区南側西S49-56、W34-41に位置する。主軸をN-62°-Wにとり、規模は東西5.7m、南北5.5mを測り、平面形は方形を呈している。第10号住居址、第8号建物址、ピット330・331に切られている。壁高は20cmを測り、その掘り込みは北壁やや緩やかで、南・東・西壁では傾斜をもって掘り込まれている。覆土には細礫が混入する暗褐色土が堆積していた。床面は礫を含む

黄褐色土の二次堆積ローンをそのまま用い、壁下を除き堅くたたきしめられていた。概して平坦であるが、地形にあわせて僅かに北から南にかけて傾斜をもち、その面積は29.4㎡を測る。施設はピット10個とカマドが確認されている。ピットはP1～P4は規模・位置的にみて主柱穴と推定され、P5を除いて、断面には柱痕が確認された。その他のピットの性格はわからないが、中央部に多く見られる。西壁の中央に位置するカマドは残存状況が悪い。粘土カマドと考えられ、僅かに壁を掘り込んで構築されている。奥壁は緩やかに立ち上がるが、煙道は確認されなかった。

遺物 土器、石器、土製品が出土している。土器はほとんどが須恵器だが土師器もみられる。量は非常に多い。土師器には甕、須恵器には環、環蓋、広口壺、短頸壺、壺、甕などがあり器種に富む。石器、土製品(土偶)は縄文時代のもので、混入品であろう。本址は3～4期に属する。

⑥ 第6号住居址(第24図)

遺構 調査地区の南西隅S58～65、W48～54に位置し、南部では第7号住居址・第8号住居址を切っている。壁の混入しない黄褐色土中に掘り込まれており、明瞭に検出された。規模は南北5.7m、東西5.5mを測り、床面積は29.4㎡である。壁の中央がやや膨らんだ方形のプランを呈し、主軸方向はN-55°-Wを示す。検出面からの残存壁高はそれぞれ北壁18cm、南壁21cm、東壁21cm、西壁9cmを測り、傾斜をもって掘り込まれている。覆土には小礫の混入する黒褐色土と黄褐色土塊が混入する暗褐色土が堆積していた。床面は地山の黄褐色土をそのまま用いているが、粘性が強くて比較的堅く平坦であった。施設はピットが12個、カマド、周溝、溝が確認されている。P1～P4は柱痕が確認されなかったが、位置・規模からみて主柱穴と考えたい。北側にある長径1.8mのP5を含め、その他のピットの性格は不明である。分布を見ると北東部に数多く見られる。カマドは西壁中央下に設けられていたが、すっかり壊されていた。被熱した燃焼部の火床が検出されただけで、構造は明らかでない。周溝はカマドのある西壁を除いて検出された。幅20cm、深さ5～10cmを測り断面皿形を呈す。概ね壁直下に検出されたが、東壁～南東隅にかけては、10cm程内側に巡る。溝は北西部で切られ2基確認された。それぞれ南北に延び、長さ1.2m、幅20cm、深さ8cm程をはかるが、その性格は不明である。

遺物 土器と石器がある。土器は土師器と須恵器がある。土師器には甕、須恵器には環、蓋などの器種がある。石器は石鏃、打製石斧、磨石類で、混入品であろう。本址の時期は3期である。

⑦ 第7号住居址(第24図)

遺構 調査地区の南西隅S62～65、W49～54に位置する。本址は第6号住居址に軸を合わせて切られ、南壁際を僅か80cmの幅で細長く検出した。長軸方向はN-62°-Wを示す。規模は現況で東西5.5m、南北0.8m、推定で南北4.2mを測る。長方形のプランを想定すると床面積は23.0㎡となる。壁はかなり緩やかに掘り込まれ、検出面からの深さは23cmを測る。覆土は黄褐色、黒褐色土の順で堆積している。床面は第6号住居址とほとんど同じ深さに作られ、比較的堅く平坦で良好な状態であった。本址に伴う施設は、壊されずに残った床面に僅かにピットが1個と周溝、第6号住居の床

面下で溝状の落ちこみを検出したに過ぎない。周溝は南壁下の5～10cm内側にあり、幅16～20cm、深さ5～10cmを測り断面半円形を呈す。溝状の落ち込みは北壁下の周溝と考えたい。

遺物 本址に伴う遺物は残念ながら全く出土していない。所属時期も推定できない。

⑧ 第8号住居址(第25図)

遺構 調査地区の南側東端S47～54、W13～17に位置し、東側は調査区域外にかかる。南端で第37号住居址を切る。現況の規模は南北2.8m、東西6.2mを測り、長方形を呈する。床面積は14.6㎡である。主軸方向はN-72°-Wを示す。壁はほぼ直に掘り込まれ、その高さは36cmを測る。床面は部分的に礫が混入しているが、地山の二次堆積黄褐色ローム土を平坦、堅固なものに叩きしめていた。発見されたピットは4個(P1～P4)を数える。このうち西側に並ぶP1・P2には柱痕が確認されており主柱穴と考えられる。これに対応する東側の主柱穴2個は調査区域外に想定したい。カマドは西壁中央に位置するが、壁を半円形に広く掘り込み、更にその中央を半円形に掘り込んで石組みカマドを構えている。両袖の礫はそのまま残されていた。燃焼部火床は被熱焼土化し、手前は大きく窪んでいる。奥壁は急に立ち上がり、煙道は確認されなかった。本址の覆土は、礫を多量に含む黒褐色土であった。

遺物 土器と石器が出土している。石器は石鏃とピエス・エスキューであるが混入品であろう。土器は土師器、須恵器がある。土師器には甕、須恵器には坏、蓋、短頸甕などの器種がみられる。土器からみて本址の時期は5期に属する。

⑨ 第9号住居址(第26図)

遺構 調査地区北側東S22～30、E1～10に位置する。主軸をN-74°-Eにとり、規模は南北5.9m、東西5.3mを測る。平面形は方形を呈している。第9号住居址にまるごと貼られる為に残存壁高は8cmと浅く、掘り込みはややなだらかである。覆土には黄褐色土ブロックが多量に混入する暗褐色土が堆積していた。床面は礫を含む黄褐色二次堆積ローム土をそのまま用いている。壁下を除き平坦であるが、地形にあわせて北から南にかけて緩やかな傾斜をもつ。その面積は28.5㎡を測る。施設はピット4個、カマド、周溝が確認されている。ピットはP1～P4が規模・位置的にみて主柱穴と推定される。西壁の中央下に位置する石組みカマドは第3号住居址のカマドに壊されている。残存度も悪く、袖石に用いられていた河原石が散乱していた。燃焼部火床は被熱する。奥壁は急に立ち上がり、煙道は確認されなかった。周溝はカマドのある西壁を除いて壁直下に確認された。幅30cm、深さ8cmを測り、断面は半円形を呈す。本址は第3号住居址と時期差も少なく、或いは第3号住居址は本址の拡張プランと捉えるべきかもしれない。この場合本址の南・西壁はそのまま利用され、北・東側を掘り上げた形となる。第3号住居址の床面は本址に比べ8cm程浅くなっている事から、本址を貼る部分では人為的な埋立が考えられる。

遺物 土師器の坏、須恵器の坏、蓋が出土している。遺物よりみて本址は3期に比定される。

⑩ 第10号住居址(第27図)

遺構 調査地区の南側西 S55~60、W33~39に位置する。北西部で第5号住居址を、南東部で第21号住居址を切る。礫の混入する暗黄褐色土中に掘り込まれている為、検出時に於いてプランの確定は困難であった。この為サブトレンチを設定して確定した。規模は南北4.3m、東西4.6mを測り、方形のプランを呈する。床面積は19.3m²を測り、長軸方向はN-58°-Wを示す。検出面からの残存壁高は4~18cmを測り、西壁では緩やかに掘り込まれている。覆土には小礫が多量に混入する暗褐色土が堆積していた。床面は小礫が含まれてはいるが、比較的堅く平坦な暗黄褐色土であった。施設はピットが10個確認されている。P1~P3には柱痕が認められるが、その規模・位置からみて主柱穴とは考え難い。その他のピットについても性格は不明である。カマドは検出されなかった。焼土の広がりも認められない。

遺物 土器、石器が出土している。土器は土師器と須恵器がある。土師器には坏、須恵器には坏と甕がある。石器はスクレーパー、打製石斧、砥石があるが、砥石を除いて混入品であろう。本址の時期は5~6期である。

⑪ 第17号住居址(第28図)

遺構 調査地区の北側東 S17~22、E6~12に位置し、ピット68・69に切られている。規模は南北4.4m、東西5.4mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-114°-Wを指す。壁は緩やかに掘り込まれ、検出面からの深さは6~20cmを測る。覆土は砂質の暗褐色土が堆積していた。床面は地山の暗黄褐色土をそのまま用い、小礫を多量に含む。比較的軟弱な状態で、起伏も認められた。施設はピットが11個とカマドが確認されている。P1~P4は掘り込みの浅いものが多いが、位置的にみて主柱穴と推定される。その他のピットの性格は不明である。カマドは東壁の中央下に構築されていた。残存状況が悪く、焼土の広がりを検出するのみであった。

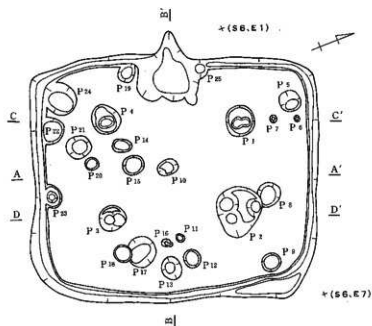
遺物 土器、石器が出土している。土器は土師器と須恵器である。土師器には坏、甕、須恵器には坏、蓋、壺類などの器種がある。石器は混入品であろう。本址の時期は5~6期であろう。

⑫ 第28号住居址(第17図)

遺構 調査地区の南端東側 S69~72、W26~30に位置し、第29号住居址・第39号住居址を切っており、南側は調査区域外にかかる。規模は現況で南北1.6m、東西4.1mを測る。方形プランを推定すると床面積は16.0m²程になろう。主軸方向はN-28°-Wを指す。壁は比較的緩やかに掘り込まれ、検出面からの深さは10cmを測る。覆土は暗褐色土が堆積していた。床面は二次堆積の暗黄褐色土で、礫を含まない。比較的堅く、起伏も認められなかった。施設はピットを4個検出したにすぎない。そのうちP1、P2は規模・位置的にみて主柱穴と推定される。その他のピットの性格は不明である。カマドは検出されなかったが、南側の調査区域外にあるのかもしれない。

遺物 土器、石器が出土している。土器は土師器と須恵器である。土師器には甕、須恵器には坏、壺類などがある。本址の時期は5~6期である。

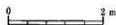
第1号住居址



- I : 赤褐色土
- II : 暗褐色土
- III : 暗褐色土(黄褐色土堆込)
- IV : 褐色土
- V : 赤褐色土(粘土堆込)
- VI : 褐色土(粘土堆込)
- VII : 褐色土(黄色土堆込)
- VIII : 黄土
- IX : 黄色土

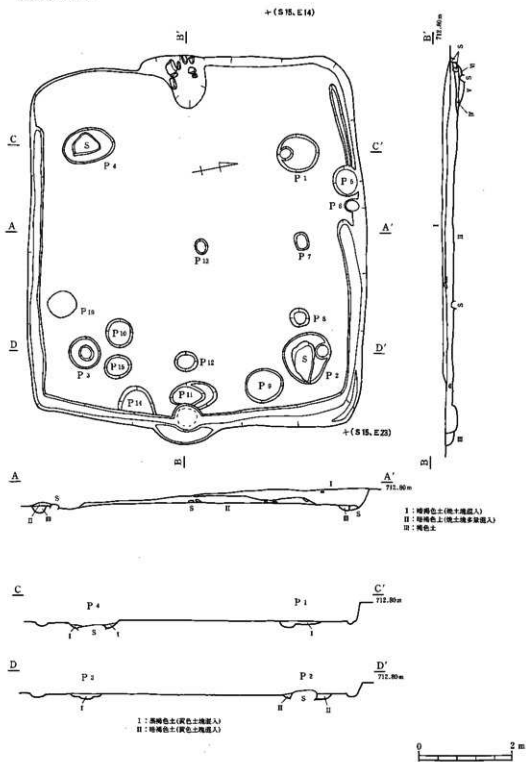


- I : 赤褐色土層と黄色土の混合層
- II : 赤褐色土(黄褐色土堆込)
- III : 赤褐色土(黄褐色土堆込)
- IV : 暗褐色土(黄褐色土堆込)
- V : 暗褐色土(黄褐色土堆込)



第19图 第1号住居址(1)

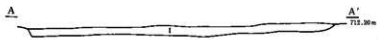
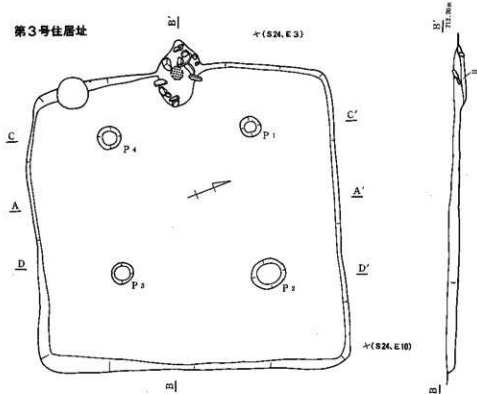
第2号住居址



第20图 第2号住居址

第3号住居址

〒(S24, E3)



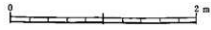
I : 赤褐色土(黄褐色土粒・小礫少量混入)
II : 暗褐色土(黄褐色土粒少量混入)



I : 黄色土
II : 暗褐色土(黄色土塊混入)
III : 黄褐色土(黄色土粒・小礫混入)

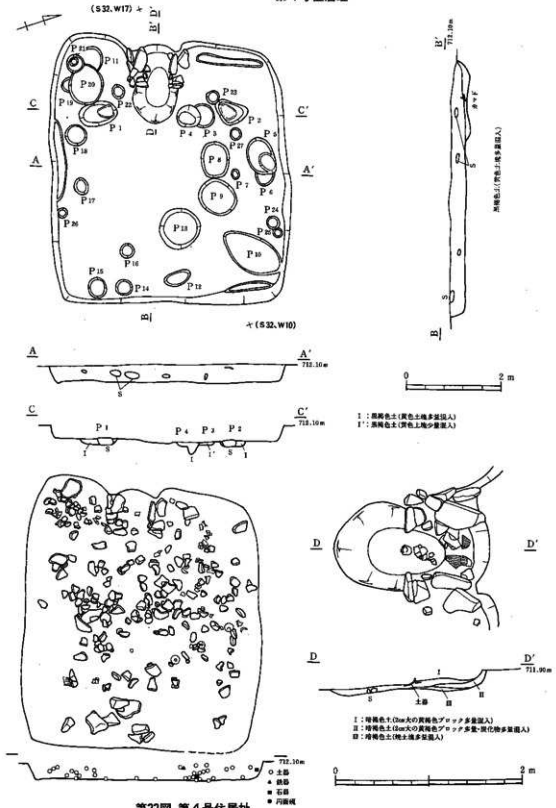


I : 暗褐色土(黄土・黄色土粒・土塊混入)
II : 黄土
III : 黄色土
IV : 暗褐色土(黄色土粒・土塊混入)



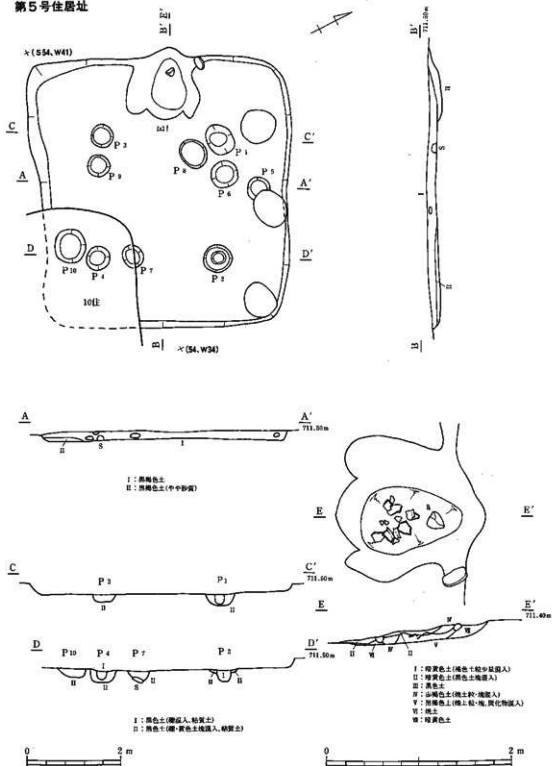
第21图 第3号住居址

第4号住居址



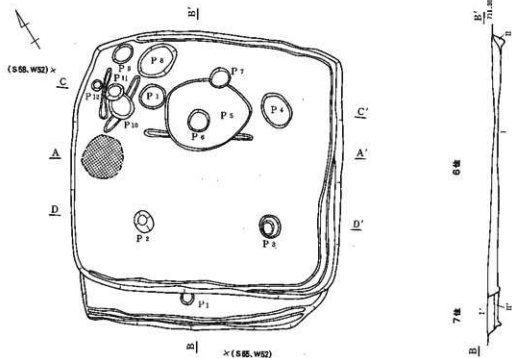
第22图 第4号住居址

第5号住居址

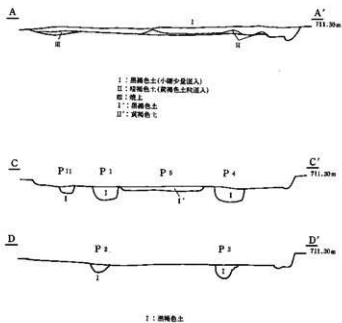


第23图 第5号住居址

第6号住居址

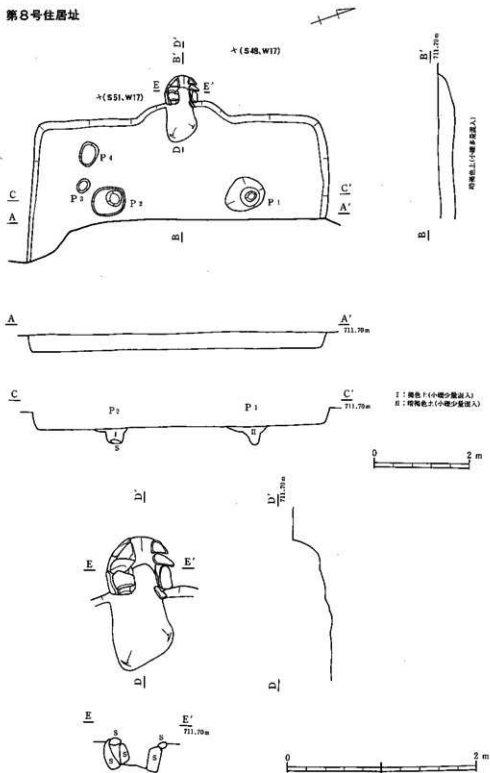


第7号住居址



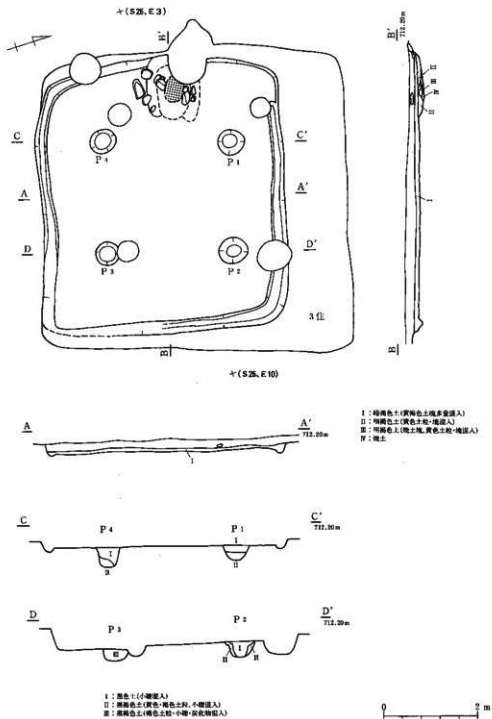
第24图 第6号·第7号住居址

第8号住居址



第25图 第8号住居址

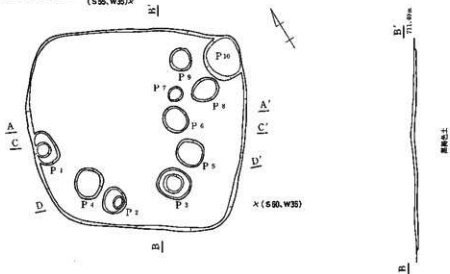
第9号住居址



第26图 第9号住居址

第10号住居址

(555.W35) x



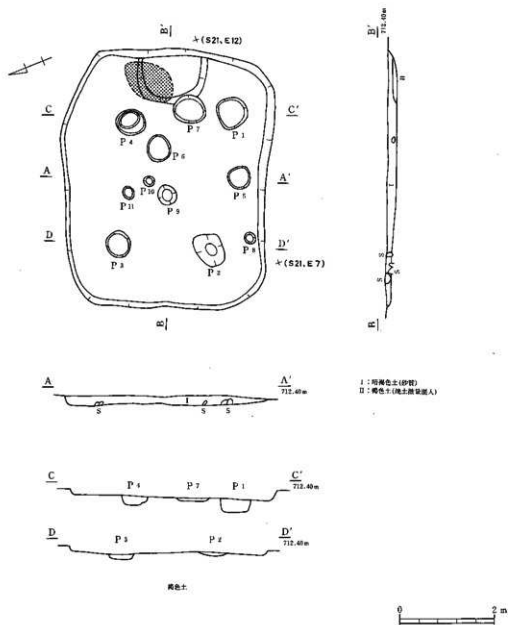
深褐色土(小礫少量混入)

第1号竖穴住居址 遗物出土状况



第27图 第1号(2)·第10号住居址

第17号住居址



第28图 第17号住居址

2. 建物址

① 第1号建物址(第29図)

調査区の南側東S48-57、W17-23に位置し、第15号竪穴住居址を切る。北側には第8号建物址(以下○建と略)・11建が隣接している。南北3間(5.3m)×東西2間(3.8m)の長方形を呈する側柱の建物で、主軸方向はN-21°Eを示す。柱間寸法は桁行1.4~2.2m、梁行1.8~1.9mを測る。掘り方の平面形はすべて円形を呈し、柱痕が確認された。柱痕の径は24~36cm程であった。掘り方は、礫の混入する暗褐色土を掘り込み、埋土は黄褐色土である。

遺物は全く出土しなかった。本址の所属時期は推定できない。

② 第2号建物址(第30図)

調査区の北側西S19-28、W7-16に位置し、北側に4建、南側にはは軸を合わせて9建が隣接する。南北3間(7.0m)×東西3間(5.3m)の側柱の建物で、平面は長方形を呈す。北面には庇がつく。主軸方向はN-28°Eを示す。柱間寸法は桁行1.4~2.2m、梁行1.5~2.0mを測る。掘り方の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、P9・P10を除いたピットには柱痕が確認された。柱痕の径は24~36cm程であった。掘り方は黄褐色土を掘り込み、埋土には黒褐色土を用いている。

遺物には土器がある。土器はすべて須恵器であり、器種には坏、蓋がある。P11から出土した蓋の破片には須恵器室内の空壁・炭が付着したものもみられた。遺物より本址の所属時期は1期に属する。

③ 第3号建物址(第31図)

調査区の中央西S32-39、W21-28に位置し、他の遺構とは切り合い・隣接関係はない。南北4間(5.4m)×東西2間(4.2m)の側柱の建物で、平面形は長方形を呈す。主軸方向はN-27°Eを示す。柱間寸法は桁行1.1~1.5mと他のものに比して少なく、梁行は1.9~2.1mを測る。掘り方の平面形は、円形もしくは楕円形を呈している。ピットにはすべて柱痕があり、そのうちP1・P3・P6の柱痕下には礎石が確認された。柱痕の径は20~32cm程であった。掘り方は礫の混入する黄褐色土を掘り込んでいる。埋土には黒褐色土と砂・礫が混入する暗褐色土を用いている。

遺物は全く出土しなかった。本址の所属時期は推定できない。

④ 第4号建物址(第32図)

調査区の北側西S13-21、EW0-W8に位置し、南側に2建が隣接している。南北3間(5.4m)×東西3間(4.9m)の方形を呈する側柱の建物で、主軸方向はN-27°Eを示す。柱間寸法は桁行1.0~2.2m、梁行1.3~2.0mを測る。掘り方の平面形は、円形もしくは楕円形を呈している。ピットにはすべて柱痕が確認され、その径は24~36cm程であった。掘り方は礫の混入する暗褐色土をほぼ直に掘り込み、埋土は黒褐色土である。

遺物は土器がある。土器はすべて須恵器であり、坏、蓋、壺類等の器種がみられる。1期に属するもので、本址の時期もそこに求める。

⑤ 第5号建物址(第33図)

調査区の北側東S26~32、E3~W3に位置する。P4は第3号竪穴住居址を切り、P10はビット507に切られる。南西には6建が隣接している。南北3間(4.4m)×東西3間(4.4m)の隅柱の建物で、平面形は方形を呈す。主軸方向はN-24°-Eを示す。柱間寸法にはばらつきがあり、桁行1.4~1.8m、梁行1.4~1.6mを測る。掘り方の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、すべてのビットには柱痕が確認された。柱痕の径は20~32cm程であった。掘り方は礫の混入する黄褐色土を掘り込み、埋土には黄褐色土塊・粒が多量に混入する暗褐色土を用いている。

遺物は土器がある。土師器と須恵器があるが、土師器には坏、須恵器に蓋がある。本址は遺物より1期に属すると推定される。

⑥ 第6号建物址(第34図)

調査区の中央東S27~35、W3~10に位置し、P6はビット510・512を切る。南西には建5が隣接している。平面は長方形を呈し、南北3間(5.8m)×東西2間(4.4m)の隅柱の建物である。主軸方向はN-20°-Eを示す。柱間寸法は桁行1.8~2.1m、梁行1.9~2.1mを測り、ほぼ一定である。掘り方の平面形は円形もしくは楕円形を呈している。ビットにはすべて柱痕が検出された。柱痕の径は、32~44cm程であった。掘り方は礫の混入する黄褐色土を傾斜をもって掘り込んでいる。埋土には黒褐色土と黄褐色土塊・粒が多量に混入する暗褐色土を用いている。

遺物は全く出土しなかった。本址の所属時期は推定できない。

⑦ 第7号建物址(第35図)

調査区の中央東S30~39、E2~9に位置し、他の遺構とは切り合い・隣接関係はない。南北4間(6.4m)×東西2間(4.1m)の隅柱の建物である。長方形プランを呈し、主軸方向はN-13°-Eを示す。本址は遺構検出時においてビットの切り合いが認められたことから、建て替えを行っているのではないかと考えていた。掘下げ開始後の土層観察の結果、ほぼ同位置に建て替えが行われていると判断した。(以下建て替え後の建物を新7建、建て替え前を旧7建とする)新7建に属するビットはP1~P10・P12・P14、旧7建はP1~P10・P11・P13である。P1~P10は共通となるが、このうちP4・P5・P8・P10には各々2個の柱痕が確認された。P1~P3・P6・P7・P9については旧7建の柱をそのまま利用したか、或いは全く同位置に建て替えが行われたと考えたい。新7建の柱間寸法は桁行1.4~1.9m、梁行は1.3~1.9mを測る。一方旧7建は桁行1.3~1.9m、梁行は1.8~2.2mである。掘り方の平面形はいずれも円形もしくは楕円形を呈し、柱痕が確認された。その径は新7建は24~40cm、旧7建は20cm程であった。埋土には新旧ともに黒褐色土と砂・礫が混入する暗褐色土を用いている。

遺物は土器がある。すべて須恵器で坏、蓋、甕等の器種が認められた。1期の様相をもつもので、本址の時期もそこに求める。

⑧ 第8号建物址 (第36図)

調査区の中央南S41~50、W14~22に位置する。南側で第15号竪穴住居址を切り、主軸を合わせて重なるように11建を切る。また南側には1建が隣接している。南北3間(6.9m)×東西2間(4.6m)の長方形を早する側柱の建物で、南面には庇がつく。主軸方向はN-26°-Eを示す。柱間寸法は桁行1.6~2.1m、梁行2.1~2.4mを測る。掘り方の平面形は円形もしくは楕円形を呈している。ピットはP₁・P₉・P₁₁・P₁₂・P₁₃を除き柱痕が確認され、その径は24~36cm程であった。掘り方は礫の混入する暗褐色土を掘り込み、埋土は黄褐色土塊が少量混入する黒褐色土である。

遺物は全く出土しなかった。本址の所属時期は不明である。

⑨ 第9号建物址 (第37図)

調査区の中央S28~36、W13~20に位置する。東側で第4号竪穴住居址を切る。南側には2建が隣接している。南北3間(5.5m)×東西2間(4.1m)の長方形を早する側柱の建物で、主軸方向はN-25°-Eを示す。柱間寸法は桁行1.2~2.3m、梁行1.8~2.3mを測る。掘り方の平面形は円形もしくは楕円形を呈している。ピットはP₂・P₆・P₈に柱痕が確認され、その径24~40cm程であった。掘り方は礫の混入する黄褐色土を掘り込み、埋土は暗褐色土である。

遺物には土器と鉄器がある。土器は縄文土器小片のみであり混入品と思われる。鉄器はP₄より環状製品が出土している。所属時期を推定しえる遺物はない。

⑩ 第10号建物址 (第38図)

調査区の北西側S46~53、W38~47に位置し、P₆~P₈は第5号竪穴住居址に切られ、ピット315を切る。他の建物址との重複・隣接関係はない。南北2間(3.9m)×東西2間(3.8m)の方形を呈する。今回の調査では唯一の総柱式建物である。主軸方向はN-31°-Eを示す。柱間寸法は桁行1.8~2.0m、梁行1.7~2.0mを測り、ほぼ一定である。掘り方の平面形はすべて円形を呈している。ピットには柱痕が全く確認されなかった。ピットは礫の混入する暗褐色土を掘り込み、埋土は黒褐色土である。

遺物は全く出土しなかった。本址の所属時期は推定できない。

⑪ 第11号建物址 (第36図)

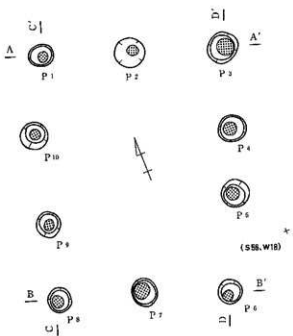
調査区の中央南S41~47、W15~21に位置する。P₁・P₅は主軸を合わせて重なるように8建のピットに切られている。南には1建が隣接している。平面形は長方形を早し、規模は南北2間(4.7m)×東西1間(3.2m)の側柱式の建物である。主軸方向はN-26°-Eを示す。柱間寸法には大きなばらつきがあり、桁行1.0~2.2m、梁行1.3~2.0mを測る。掘り方の平面形は、円形もしくは楕円形を呈する。すべてのピットには柱痕があり、そのうちP₆では2個を確認した。柱痕の径は40~54cm程であった。掘り方は礫の混入する暗褐色土を掘り込み、埋土には黄褐色土塊が少量混入する暗褐色土を用いている。

遺物は全く出土しなかった。本址の所属時期は不明である。

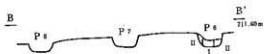
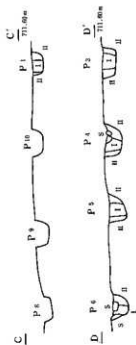
第1号建物址

(548, W18)

*



(558, W18)

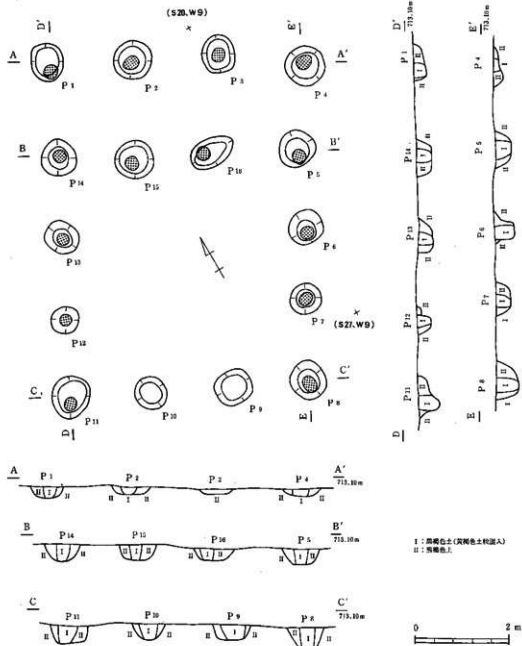


1: 灰褐色土
II: 黄褐色土



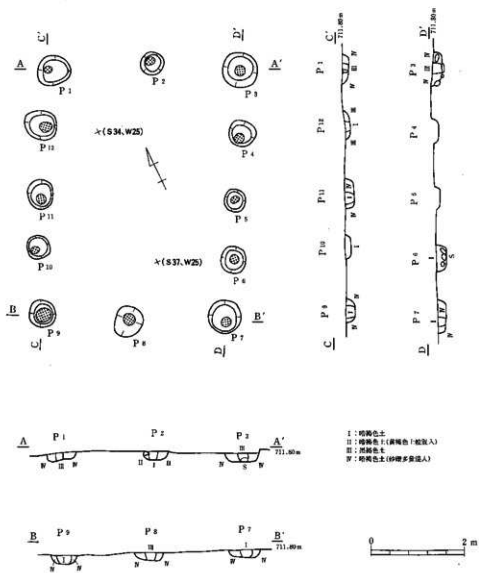
第29图 第1号建物址

第2号建物址



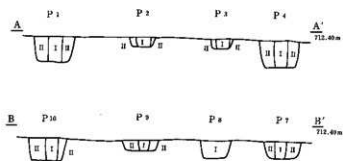
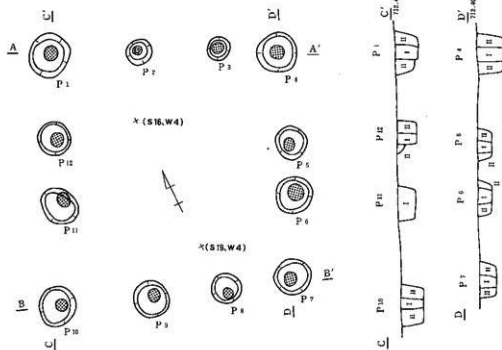
第30图 第2号建物址

第3号建物址



第31图 第3号建物址

第4号建物址

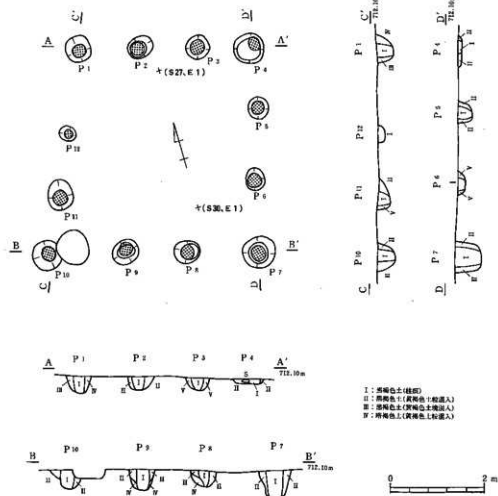


I : 黄褐色土 (黄褐色土粒込)
 II : 黑褐色土



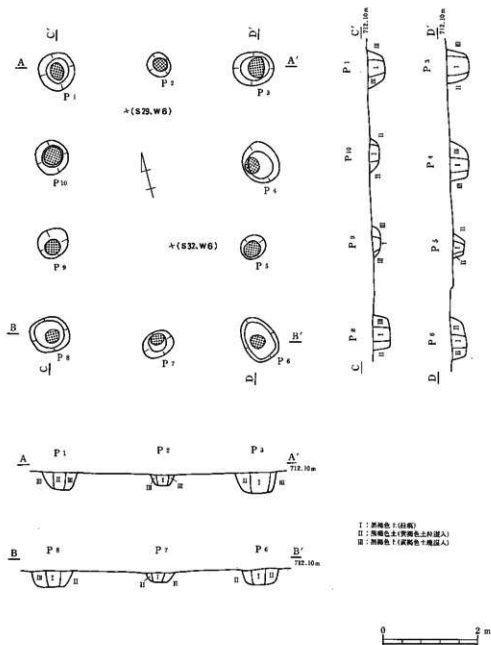
第32图 第4号建物址

第5号建物址



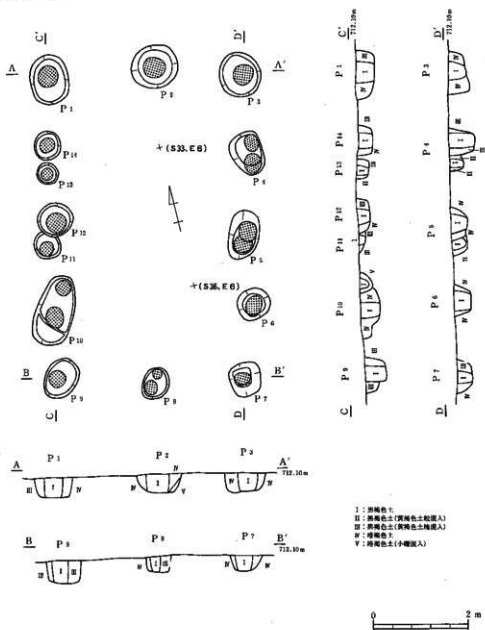
第33图 第5号建物址

第6号建物址

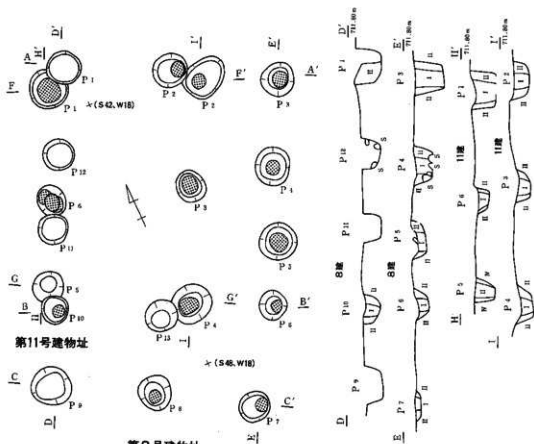


第34图 第6号建物址

第7号建物址

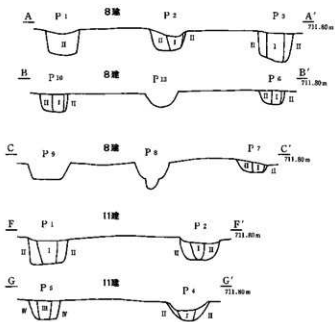


第35图 第7号建物址



第11号建物址

第8号建物址

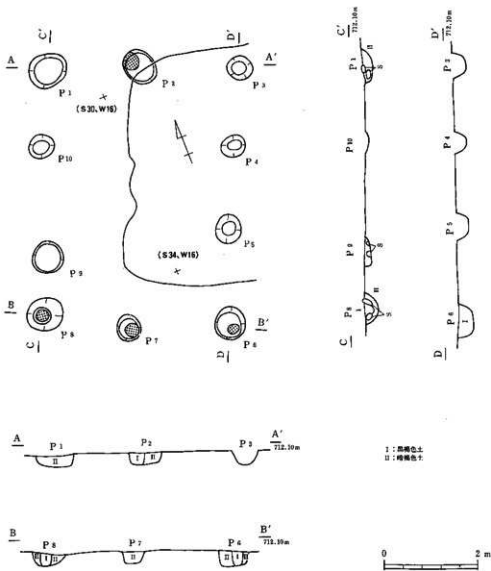


- 8建**
- I: 褐色土
 - II: 赤褐色土(黄褐色土塊少量混入)
- 11建**
- I: 褐色土
 - II: 暗褐色土(黄褐色土塊混入)
 - III: 赤褐色土(黄褐色土塊少量混入)
 - IV: 黄褐色土(黄褐色土塊多量混入)



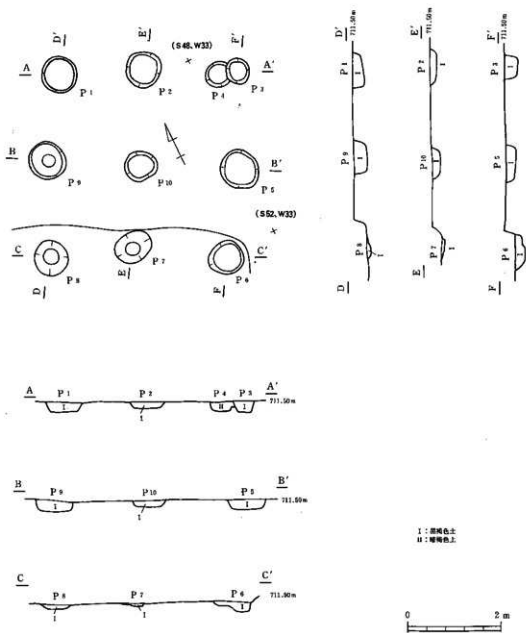
第36图 第8号·第11号建物址

第9号建物址



第37图 第9号建物址

第10号建物址



第38图 第10号建物址

3. 竪穴状遺構 (第39図)

① 第1号竪穴状遺構

調査地区の北西隅NS0～S7、EW0～W6に位置し、第3号土坑を切る。西側は調査区域外にかかる。礫が混入した暗褐色土の地山に、それ以上に礫が入る黒褐色土の落ち込みとして本址を検出した。西側半が区域外となるため明らかではないが、平面形は円形を呈し、直径は7.4m程を測るものと予想する。壁は傾きをもって掘り込まれており、残存壁高は14～20cmであった。底面は礫を含むために細かな起伏があり、地形に合わせて北から南へ傾斜している。本址に属する施設はピットのみで、総数12個検出された。いずれも柱痕は確認されなかった。本址の覆土と同じ黒褐色土が堆積していたが、その性格は不明である。

遺物には土器がある。量的には少なく、摩滅しているのも多い。本址の時期は遺物よりみて縄文時代中期後半曾利Ⅳ期と推定される。

② 第2号竪穴状遺構

調査地区の中央西S29～36、W20～25に位置している。東壁を第4号建物址に切られる。規模は長軸3.5m、短軸3.2mを測り、プランは小形の円形を呈する。褐色土の覆土は12cmと浅いが、緩やかに掘り込まれた様子が窺える。底面は暗黄褐色土の二次堆積ロームで礫が露出する。大きな起伏があって非常に軟弱であり、面積は8.3㎡を測る。中央部には礫がまとまってみられた。本址に伴う施設はピットのみ4個が検出された。

遺物は少なく、摩滅した土器片が出土している。本址の時期は遺物よりみて縄文時代中期後半曾利Ⅲ期と推定される。

③ 第3号竪穴状遺構

調査地区南側中央S47～51、W25～31に位置する。ピット306・412に切られる。規模は長軸5.2m、短軸3.9mの楕円形を呈し、現況での床面積は15.7㎡を測る。覆土は暗褐色土と黒褐色土が堆積しており、上層から底面にかけて10cm大の礫が多量にみられた。検出面からの壁高は12cmと浅いが、緩やかに掘り込まれている。底面は二次堆積ロームの暗黄褐色土である。起伏があり、多量の礫が露出していた。ピットなどの施設は検出されなかった。

出土した遺物の量は非常に少なく、土器片が出土している。本址の時期は遺物よりみて縄文時代中期と推定される。

4. 土坑・ピット (第40図)

本遺跡では竪穴状住居址、建物址、竪穴状遺構などの各遺構に伴うピット以外の穴で、長径が1m以上のものを土坑、それ以下をピットとして扱った。

①土坑

今回の調査で検出された土坑は第1号土坑～第12号土坑、第14号土坑～第27号土坑、第33号土坑～第37号土坑の31個である。(以下○土坑と略す) 30・31・32土坑はB地区にある。分布をみると全域に散在している。特に目立った集中はないが、第1号竪穴状遺構の東側に1土坑～6土坑が集まっている。平面形をみると楕円形を呈するものが多く、円形が次ぐ。方形・長方形の類は11土坑のみであった。規模は長径で最小100cm、最大176cmを測る。100～120cmのものが多い。出土した遺物から所属時期が推定されるものはほとんどない。縄文3個(1・33・36土)、奈良・平安6個(9・10・11・14・19・34土)となる。以下特徴的なものについてのみ記述してみたい。

第36号土坑

調査地南西部S62～63、W38～39に位置し、第16号住居址の覆土内に検出された。平面形は楕円形を呈し、規模は南北112×東西76cm、深さ32cmを測る。壁は傾きをもって掘り込まれ、断面は皿型を呈す。覆土は暗褐色土が堆積しており、礫は混入していなかった。遺物は土器片がまともって出土している。本址の時期は遺物より、縄文時代中期後葉曾利Ⅳ期と推定される。

第9号土坑

調査地北側S17～19、E2～3に位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、規模は南北124×東西156cm、深さ18cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、断面は皿型を呈す。覆土には黄色土壌の混入する暗褐色土が堆積していた。起伏のある底面には礫が数個みられた。遺物には須恵器の環、甕の破片がある。本址の時期は明らかではないが、奈良時代後半4期以前のものであろう。

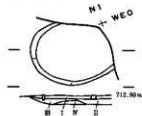
②ピット

ピットは425個が検出された。分布をみると調査地区の中央に集中している。北端部・南東部ではあまり検出されていない。規模は長径で最小10cm、最大99cmを測り、20～30cmのものが大半を占める。調査を実施できたものは少なく、検出するにとどまったものが多い。出土した遺物から所属時期が推定されるものはピット513のみである。以下ピット513についてのみ記述する。

ピット513

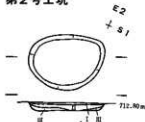
調査地南東部S70～71、W30～31に位置し、第26号住居址の西壁を壊したかたちで確認された。検出当初それとは気付かず、第26号住居址に伴うピットとして扱っていた。平面形は楕円形を呈し、規模は南北62×東西52cm、深さ20cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれ、壁と底面の区別もつげにくい。底面のほぼ中央には縄文時代の深鉢が正位に埋設されていた。埋土には黒褐色土が堆積していた。屋外にある単独の埋設土器と考えたい。本址の時期は埋設土器より、縄文時代中期後葉曾利Ⅰ期と推定される。

第1号土坑



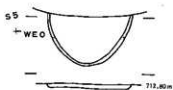
- I : 黄褐色土
- II : 暗褐色土
- III : 暗褐色土(黄色土较多混入)
- IV : 褐色土(黄色土较多混入)

第2号土坑



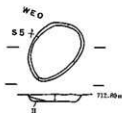
- I : 黄褐色土
- II : 暗褐色土(黄色土较多混入)
- III : 黄褐色土(暗褐色土混入)

第3号土坑



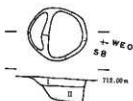
暗褐色土(黄褐色土混入)

第4号土坑



- I : 暗褐色土(黄褐色土混入)
- II : 褐色土(黄褐色土混入)

第5号土坑



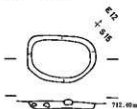
- I : 黄褐色土
- II : 黄褐色土(黄褐色土混入)

第6号土坑



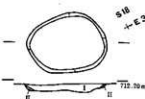
褐色土(暗褐色)

第8号土坑



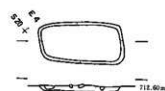
暗褐色土(暗多混入)

第9号土坑



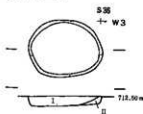
- I : 暗褐色土(黄色土混入)
- II : 暗褐色土(黄色土较多混入)

第10号土坑



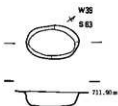
暗褐色土(黄褐色土混入)

第14号土坑



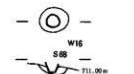
- I : 黄褐色土
- II : 暗褐色土(黄褐色土混入)

第36号土坑

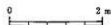


黄褐色土

ビット513



黄褐色土



第40图 土坑・ビット

第4章 調査のまとめ

1. 住居址について

今回検出された竪穴住居址は縄文時代15軒、古墳時代末期以降12軒である。縄文時代の竪穴住居址の分布は調査区の南側に見られる。時期的には中期中葉、藤内Ⅱ段階に19・26・27住、中期後葉、曾利Ⅱ段階に16・18・22・23・24・29住、曾利Ⅳ～Ⅴ段階に15・20・21・37住がある。埋葬が確認されたものには15・18・21・26住がある。拡張を行なったと思われるものには16・20住の2軒がある。古墳時代末期以降の住居址は調査区の北側に多くみられる。時期別には1期に1住、2期に2住、3期に6・9住、3～4期に4・5住、4期に3住、5期に8住、5～6期に10・17・28住がある。カマドの構築方法が推定されるものには粘土軸に1・5住、石組みカマドに2(新)・3・4・8・9住がある。1・2住は建て直しが行われていた。また2住の支柱穴には礎石が残っている。遺物では1住出土の上師器、須恵器、4住の円面硯は良好な資料であり注目される。

2. 建物址について

今回の調査で検出された建物址は11棟である。これらの建物址について規模、ピット、位置等について簡単に述べたい。11棟の建物址を規模別に分類すると2間×1間が1棟(第11号建物址〔以下〇礎と略〕)、2間×2間が1棟(10礎)、3間×2間が4棟(1・6・8・9礎)、3間×3間が3棟(2・4・5礎)、4間×2間が2棟(3・7礎)となる。建物の柱配りから見ると礎柱式は10礎のみで、倒柱式がほとんどである。庇が付くものには北面につく2礎、南面につく8礎の2棟がある。面積は最小14.8(10礎)～最大37.1㎡(2礎)を測り、かなりばらつきがある。柱間寸法も1.0～3.2mと巾が広く、1.2m～2.2mのものが多い。平面形態をみると長方形が多く9、方形2となる。ピットの規模は長径で最少36～最大108cmをはかり、平面形は円形もしくは楕円形を呈し、方形のものは全く見られない。確認された柱痕の規模は20～54cmであり、かなり太い柱を使用している。今回の調査範囲内で建物址の位置を見ると、調査区中央部に集中している。建物址同上の切り合い関係では、8礎と11礎(8礎が新)のみが認められる。また主軸方向は、7礎のN-13°-Eを除くと、N-20°-E～N-31°-Eの間に収まり、ある程度の企画性が窺える。遺物により所属時期が推定されるものは少なく、2・4・5・7礎がある。いずれも1期に比定される。重複関係からは10礎は3～4期以前、11礎は5期以前、9礎は3～4期以降と言える。一方1期の竪穴住居址は1軒のみである。今回の調査に限ってみると、古墳時代末期以降に於ける本遺跡の開発は建物址が先行していたと考えられよう。また2礎からは須恵器窯内の窯壁・炭が付着した蓋の破片が出土しており、この時期の須恵器生産と何らかの関係が指摘されよう。なお本調査では425個のピットを検出しており、建物址のピットとよく似た覆土をもつものも多数確認できた。ここに挙げた11棟のほかにも検出できなかったものがあるかもしれない。

表 1

墳卒遺跡 I 住居址一覽表

遺跡 番号	図号	土軸方向	平面形	規 模		カ マ ド ・ 炉			所属時期	備考
				長軸×短軸×深さ (cm) 南北×東西×深さ (cm)	床面積 (㎡)	位 置	形 態	規模 (cm)		
1	19	N-67°-W	隅丸長方形	608×506×29	30.0	西壁中央	粘土カマド	130×150	1期	礎石?
2	20	N-81°-W	方形	816×712×32	53.2	西壁中央	石組カマド	64×72	2期	
3	21	N-75°-W	方形	656×645×26	40.0	西壁中央	石組カマド	78×141	4期	
4	22	N-70°-W	長方形	569×498×38	26.4	西壁中央	石組カマド	129×182	3~4期	
5	23	N-62°-W	方形	570×553×22	29.4	西壁中央	粘土カマド	154×156	3~4期	
6	24	N-55°-W	方形	571×550×19	29.4	西壁中央	不明	86×94	3期	
7	24	(N-62°-W)	長方形?	(552×82)×21	(34.4)	西壁中央	不明		不明	
8	25	N-72°-W	方形?	623×280×34	(14.6)	西壁中央	石組カマド	78×58	5期	
9	26	N-74°-W	方形	593×532×10	28.5	西壁中央	石組カマド	111×133	3期	
10	27	N-58°-W	方形	461×428×19	19.3		不明		5~6期	
15	7	N-49°-E	楕円形	558×493×22	(22.0)	中央東側	石組炉	80×60	曾利V~V	埋藏
16	8	N-55°-W	円形	618×602×8	28.8	中央西側	石組炉	97×88	曾利II	
17	28	N-114°-E	隅丸長方形	544×440×20	22.0	東壁中央	不明	144×116	5~6期	
18	9	N-61°-W	楕円形	(591×480)×18	(4.4)		不明		曾利II	埋藏
19	15	N-156°-W	楕円形	(507)×460×11	(11.9)	中央	石組炉	85×(47)	藤内II	
20	10	旧)N-125°-E 新)N-54°-W	円形 円形	(424×387)×18 542×524×18	(12.3) 22.7	中央内側 中央東側	石組炉 石組炉	84×77 94×92	曾利IV~V 曾利IV~V	拡張か
21	11	N-136°-E	不整形	(629)×595×12	(23.5)	中央東側	石組炉	109×101	曾利IV~V	埋藏
22	12	N-78°-W	楕円形	353×307×10	9.0	中央	石組炉	71×55	曾利II	
23	13	(N-54°-E)	円形?	(448×380)×10	(6.0)	中央	不明		曾利II	
24	13	N-66°-W	円形	460×432×12	(14.7)	中央	石組炉	(115×72)	曾利II	
26	14	N-49°-W	円形	539×508×14	21.7	中央	石組炉	66×54	藤内II	埋藏
27	15	N-40°-E	楕円形	(410×206)×12	(8.7)	中央	石組炉	57×55	藤内II	
28	17	(N-28°-E)	方形?	(412×165)×12	(6.4)		不明		5~6期	
29	12	N-58°-E	円形	(505×350)×5	(10.2)	中央	石組炉	67×67	曾利II	
36	9	不明	不明	不明	不明		石組炉	65×56	不明	
37	16	N-48°-E	不明	(406×252)×30	(7.2)	北寄り	石組炉	94×78	曾利IV~V	
39	17	不明	不明	(500×137)×12	(5.6)	区域外か	不明		不明	

表 2

塩卒遺跡 I 建物址一覧表

No	平面形状 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴間取(cm)			柱穴平面形	柱頭有無 ○×	建物址所見	
					No	間 隔	深 全				
1	長方形 側柱式	N-21°-E	3間×2間 5.3×3.8	桁1.4~2.2 梁1.8~1.9	1	56	45	24	円形	○	15住を切る。
					2	64	64	24	円形	○	
					3	64	61	32	円形	○	
					4	60	56	36	円形	○	
					5	60	59	37	円形	○	
					6	52	52	28	円形	○	
					7	63	51	22	円形	○	
					8	53	49	26	円形	○	
					9	52	49	26	円形	○	
					10	60	57	32	円形	○	
2	長方形 側柱式	N-28°-E	3間×3間 7.0×5.3	桁1.4~2.2 梁1.5~2.0	1	79	65	24	楕円形	○	北面残付 1期
					2	82	80	21	円形	○	
					3	80	68	12	楕円形	○	
					4	86	84	18	円形	○	
					5	80	74	36	円形	○	
					6	74	72	46	円形	○	
					7	68	66	30	円形	○	
					8	82	76	48	円形	○	
					9	76	72	36	円形	×	
					10	72	64	35	円形	×	
					11	90	80	48	円形	○	
					12	58	56	30	円形	○	
					13	77	66	35	楕円形	○	
					14	76	74	37	円形	○	
					15	81	80	35	円形	○	
					16	101	59	29	楕円形	○	
3	長方形 側柱式	N-27°-E	4間×3間 5.4×4.2	桁1.1~1.5 梁1.9~2.1	1	71	63	22	不整形	○	F ₁₀₇ に貼られ、 9住を貼る。
					2	50	49	19	円形	○	
					3	80	78	27	円形	○	
					4	73	60	15	楕円形	○	
					5	55	45	13	楕円形	○	
					6	60	55	23	円形	○	
					7	72	71	19	円形	○	
					8	71	60	17	不整形	○	
					9	63	56	21	円形	○	
					10	52	47	13	円形	○	
					11	63	52	21	楕円形	○	
					12	71	62	16	円形	○	
4	長方形 側柱式	N-27°-E	3間×3間 5.4×4.9	桁1.0~2.2 梁1.3~2.0	1	95	89	56	円形	○	1期
					2	54	51	21	円形	○	
					3	51	46	17	円形	○	
					4	85	84	57	円形	○	
					5	73	62	64	楕円形	○	
					6	81	77	30	円形	○	
					7	80	72	37	円形	○	
					8	67	63	38	円形	○	
					9	78	74	24	円形	○	
					10	89	77	44	楕円形	○	
					11	85	70	40	円形	○	
					12	71	68	42	円形	○	
5	方形 側柱式	N-24°-E	3間×3間 4.4×4.4	桁1.2~1.8 梁1.2~1.6	1	57	56	38	円形	○	1期
					2	56	45	30	楕円形	○	
					3	51	49	29	円形	○	
					4	66	66	11	円形	○	
					5	49	45	32	円形	○	
					6	50	41	16	楕円形	○	
					7	70	67	58	円形	○	
					8	59	48	37	楕円形	○	
					9	58	49	46	楕円形	○	
					10	64	60	42	円形	○	
					11	68	54	29	楕円形	○	
					12	36	32	16	円形	○	

No	平面形状 柱間隔	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)			柱穴平面形	柱底有無 ○×	建築物所見	
					No	長さ	幅				深さ
6	長方形	N-20°-E	3間×2間 5.8×4.4	桁1.8~2.1 梁2.1~2.2	1	80	76	42	円形	○	
					2	53	48	25	円形	○	
					3	86	72	45	楕円形	○	
					4	90	74	39	楕円形	○	
					5	54	48	26	円形	○	
					6	98	72	36	楕円形	○	
					7	68	55	20	楕円形	○	
					8	82	76	36	円形	○	
					9	69	61	18	円形	○	
					10	71	70	24	円形	○	
7	長方形	N-13°-E	4間×2間 6.4×4.1	桁 新)1.4~1.9 旧)1.3~1.9 梁 新)1.8~2.2 旧)1.8~2.2	1	105	79	42	楕円形	○	建て替えか? 1期
					2	98	92	41	円形	○	
					3	96	88	46	円形	○	
					4	90	70	57	楕円形	○2ヶ	
					5	108	64	37	楕円形	○2ヶ	
					6	69	65	36	円形	○	
					7	70	69	35	不整円形	○	
					8	69	54	37	楕円形	○2ヶ	
					9	90	68	50	楕円形	○	
					10	150	64	44	楕円形	○2ヶ	
					11	62	56	16	円形	○	
					12	73	70	32	円形	○	
					13	47	45	31	楕円形	○	
					14	62	57	36	円形	○	
8	長方形	N-26°-E	3間×2間 6.9×4.6	桁1.6~2.1 梁2.1~2.4	1	73	72	56	円形	×	15住・11建を切る。 南面庇付
					2	76	72	46	円形	○	
					3	74	70	61	円形	○	
					4	82	73	40	円形	○	
					5	81	78	26	円形	○	
					6	64	58	31	円形	○	
					7	66	64	11	円形	○	
					8	76	75	56	円形	○	
					9	63	58	35	円形	×	
					10	66	57	38	楕円形	○	
					11	64	63	40	円形	×	
					12	69	65	41	円形	×	
					13	73	61	33	楕円形	×	
9	長方形	N-25°-E	3間×2間 5.5×4.1	桁1.2~2.3 梁1.8~2.3	1	83	74	27	円形	×	4住を切る。
					2	81	65	29	楕円形	○	
					3	61	52	30	楕円形	×	
					4	57	49	25	楕円形	×	
					5	63	60	27	円形	×	
					6	70	65	33	円形	○	
					7	60	52	27	楕円形	×	
					8	79	70	31	円形	○	
					9	69	65	8	円形	×	
					10	57	51	8	円形	×	
10	方形	N-31°-E	2間×2間 3.9×3.8	桁1.8~2.0 梁1.7~2.0	1	77	74	22	円形	×	5住に貼られる。
					2	77	74	13	円形	×	
					3	56	50	25	円形	×	
					4	57	54	20	円形	×	
					5	87	79	21	円形	×	
					6	76	69	22	円形	×	
					7	82	64	15	円形	×	
					8	75	73	11	円形	×	
					9	79	75	29	円形	×	
					10	70	62	15	円形	×	
11	長方形	N-26°-E	2間×1間 4.7×3.2	桁1.8~2.6 梁2.8~3.2	1	85	82	58	円形	○	8建に貼られる。
					2	96	75	49	楕円形	○	
					3	72	62	33	楕円形	○	
					4	88	80	40	円形	○	
					5	69	68	46	円形	○	
					6	69	60	28	楕円形	○2ヶ	



第1号住居址 遺物出土状況



同 遺物出土状況



同 遺物出土状況



同 完掘



同 カマド



第2号住居址 完掘



同 P₂礎石



同 P₂礎石



第3号住居址 遺物出土状況



同 完掘



第4号住居址 凹面視出土状況



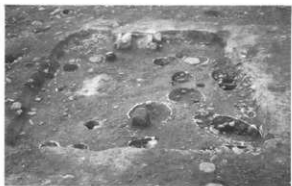
同 遺物出土状況



同 遺物出土状況



第4号住居址 遺物出土状況



同 完掘



同 カマド



第5号住居址 遺物出土状況



第6号住居址 完掘



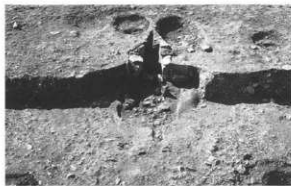
第7号住居址 完掘



第8号住居址 遺物出土状況



同 完掘



同 カマド



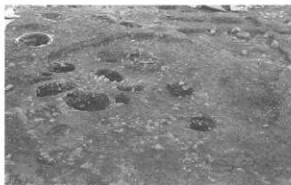
第9号住居址 完掘



第10号住居址 完掘



第15号住居址 遺物出土状況



同 完掘



同 炉址



第16号住居址 遺物出土状況



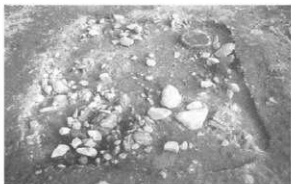
同 遺物出土状況



同 完掘



同 炉址



第17号住居址 遺物出土状況



第17号住居址 遺物出土状況



同 カマド



第19号住居址 遺物出土状況



同 完掘



同 炉址



第20号住居址 遺物出土状況



同 炉址1



同 炉址2



第21号住居址 遺物出土状況



同 完掘



同 埋袋



同 埋袋 底部



同 炉址



第22号住居址 遺物出土状況



同 遺物出土状況



同 完掘



第22号住居址 炉址



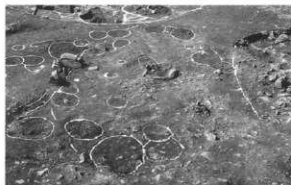
第23号住居址 炉址



第24号住居址 遺物出土状況



第26号住居址 完掘



第27号住居址 遺物出土状況



同 完掘



同 炉址



第28号住居址 遺物出土状況



第29号住居址 炉址



第36号住居址 炉址



第37号住居址 遺物出土状況



同 炉址 遺物出土状況



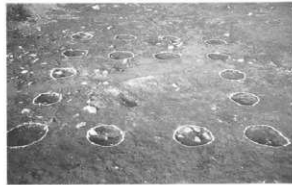
同 炉址 遺物出土状況



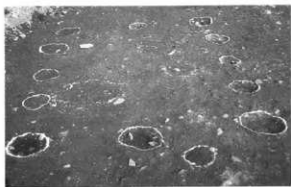
第39号住居址 完掘



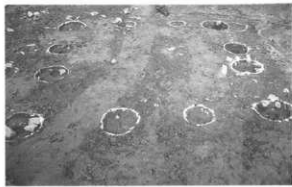
第1号建物址



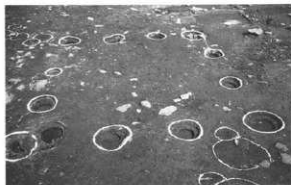
第2号建物址



第3号建物址



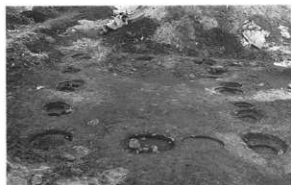
第4号建物址



第5号建物址



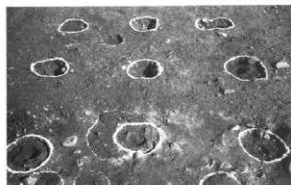
第6号建物址



第7号建物址



第8号建物址



第10号建物址



第11号建物址



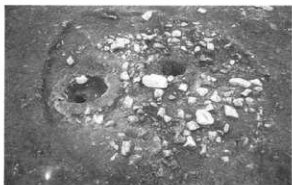
第1号竖穴状遺構 遺物出土状況



同 完掘



第2号竖穴状遺構 遺物出土状況



第3号竖穴状遺構 遺物出土状況



第4号土坑 完掘



第7号土坑 完掘



第10号土坑 遺物出土状況



第20号土坑 完掘



第31号土坑 完掘



第32号土坑 完掘



第33号土坑 遺物出土状況



作業風景



降雨による水没



除雪作業



除雪・排水作業



作業風景

松本市文化財調査報告 No.95

松本市塩辛遺跡Ⅰ

平成4年3月20日 印刷

平成4年3月30日 発行

編集 松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
TEL0263(34)3000

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社

